
とある魔術の全能氷域 『オールレギオン』

白猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の全能氷域『オールレギオン』

【Nコード】

N7672V

【作者名】

白猫

【あらすじ】

学園都市。

そこには七人しかいない超能力者の曲者を筆頭に、二百三十万人もの人間が存在していた。

そんな中、内情を探るためにイギリス清教から一人の少年が送り込まれる。

名は三鏡零次。

魔術師としての力は平凡、戦闘スキルも平凡、肉弾戦も平凡と、何をとつても良い所などなかった。

だが、彼と関わった者たちは、次第に畏敬の念を抱き始める。

科学と魔術が交差するとき、三鏡零次の物語は加速する。

1話 とある少年（前書き）

一話に一回以上ルビを振っているので、パソコンで読む事をここに
おすすめしておきます。

ついでに、実は元々程よく行空けをしていたのですが、何だか気に
食わないのでぎっしりにしますw

なので、縦読みをお勧めしておきます。

1話 とある少年

「ちょっとー、勘弁してくださいよお。僕これから初めて学校に行くんですよ？」

鉛筆を捨て、ジャケット風紀委員の事務所の机で、三鏡零次はだれていた。

淡々しい水色の髪が窓からの風で靡き、白い夏服が太陽に晒される。真夏の蝉の鳴き声が、少年の気持ちさをさらに盛り上げていた。

「……だから初犯ですので、反省文を誠意を込めて書き込んで保護者に連絡すればそれで済むと言っているんですよ？ 見た所高校生ですわね？ 今日から夏休みですから、向かう必要はありませんの」

ひらひらと、少女が原稿用紙を揺らした。

白井黒子。

茶色いツインテールが振り返る度にふわふわと動くが、もはや恐怖しか浮かばない。

(あーあ、なんでこんな……)

零次は、記憶を辿る。

さんとさんと日照りが射す真夏の朝。程よい空腹感に苛まれ、ふらつとハンバーガーという誘惑に負けてしまったのがいけなかったのだろう。

科学の街と呼ばわれているからか、セキュリティは万全だった。イギリスでは簡単に食い逃げが出来たというのに、ハンバーガー屋で外へ出ると不思議なロボットに囲まれ、逃亡を図った所、風紀委員に確保されてしまった。

しかもその風紀委員は、大能力者のテレポーター空間移動であったのだ。

逃げ切るなど不可能に等しく、事務所に連行され、現在に至って

いる。

（保護者って言われてもなあ……）

物心ついたときから、家族などいなかった。

ネセサリウス
絶対悪の教会。

そこが、自分が生まれ育った魔術結社だった。

才能のない者が才能のある者の真似をするのが魔術。それすらも満足に扱えないのだから、今回の潜入スパイの仕事を受けたのだ。土御門曰く、魔術師が能力開発が行われると、魔術を使う度に体内の血管が破裂するような痛みが伴うという。

でも、それでも良かったのかも知れない。

結局、零次には力などなかったのだ。天才的な魔術師やそれを超える聖人には、逆立ちしたって永遠に敵う事はない。

だから零次は、能力開発に可能性を見出したのだ。

魔術に才能が無いのなら、もしかしたら能力者として大成するかも、と言った願望はあった。

そして、学園都市にIEDを作り、特例で身体検査システムスキャンをした結果が強い能力者。結局、半端者はどこまで行っても半端者なのだ、現実に直面したのだ。

「おっと、失礼するよ」

扉近くからの声に、零次は振り返る。

真っ赤な長髪を垂らし、右目の下に漆黒のバーコードが存在し、そしてタバコを啜えた長身の男。スタイルマガヌスが立っていた。

が、彼は学園都市を訪れるのを嫌っている。

彼自身ここでは身分証明ができないせいでもあるが、何より学生が八割を占める学園都市にタバコを売る人など滅多におらず、いたとしても未成年は購入が不可能だからだろうか。

「なんですの？」

「そつちの子、引き取っていいかな？ 僕の知り合いなんだ」
タバコの煙を吐き出しながら、ステイルが呟く。

一瞬白井も嫌そうな顔をしたが、表情を切り替えて答えた。

「でしたら、嚴重注意で今回は釈放としますわ。私は仕事に戻らせていただきますの」

すう。

風切り音も立てずに、少女が消える。

空間移動者とは十一次元を演算にて移動を可能にする。実際、原理などは分からないが、魔術では不可能な芸当だろう。

そして、ため息をつきながら、ステイルが問い掛ける。

「それにしても……君は何をやっているんだい？」

「いや、ローラが日本円くれなかつたんだもん。でね、食い逃げしたら捕まってるね」

「……大体なんだって潜入なんて仕事を受けたんだい？ 難だが、君に土御門以上の効率の良い振る舞いが出来るとは思えないが」

「……うん」

零次は静かに頷く。

ステイルの髪色によく似た真紅の瞳を、じつと見据えた。

才能がないのが魔術と言うが、超能力と魔術を二分する才能とは、ただ単に独自の能力を確立できるか否かであり、魔術という科学的に立証できない分類にも、天賦の才は確かに存在する。

目の前で悠々と佇む長身の男も、現存する二十四ものルーン文字の完全な応用に加え、六つの新たな文字を生み出した。いわゆる一種の天才だ。

やれやれ、と言った表情でステイルが告げた。

「さすがは最大主教の幼馴染、いや、この表現は合ってるかな？
アイクビッシュ

……まあいい。君の学生寮だそう。仕事場が近くなりそうだけど」
手渡された真っ白な紙を受け取る。

裏側には住所が書かれており、ついでに小さな文字が書かれていた。

「ほうほう、呼んで五秒後に爆発って、なんだか時限爆弾みたいだね」

読み取って、零次は微笑む。能天気にも冗談だと決め付けて窓の外へと一度目を向けるが、じりじりと指先付近が熱い。

気がつけば、零次の持っていたそれには火が灯っていた。

「え？ これ本物!？」

考える間など既になく、零次は紙を一瞬で丸め、窓の外へと放り投げた。

「ぱあん。」

クラツカー音を鳴らして、薬玉のように紙吹雪が舞う。

しばらく、それをぼんやりとそれを見つめた。

「ステイル……ル？」

零次が振り返ったとき、ステイルⅡマグヌスはもうその場にはいなかったのだ。

1話 とある少年（後書き）

お初にお目にかかります、白猫です。

いやあ、衝動に刈られて書いてしまいました。

これからも頑張りますので、応援よろしくお願いします。

2話 依頼

「ここ？」

大きな影として聳え立つ建物の前で、零次はそれを見上げていた。真夏のうだるような暑さに加え、ここまで歩いて来た事で足元がふらふらと妙に危なっかしい。

確か七階だったかな、と曖昧に記憶を辿って階段を歩く。

学園都市の学生寮は、普通そのものだった。

それなりに整った外見に、それなりに綺麗な通り道、極めつけはオートロックでもなんでもないキー使用のドア。

軽く落胆しながらも、零次は七階まで辿り着く。

自室のドアを開けようとしたが、零次は思い留まった。学生とはいえ挨拶もなしに勝手に隣へと住まうのはどうだろうと疑問を感じたのだ。

幸い、零次の部屋の左隣は土御門。見知った人間で、あんな人間に挨拶など不要だと切り捨てる事ができるだろう。

だからこそ、零次は右隣の部屋のドア前に立った。

(えっと……うえじょう？ かみじょう？)

下らない事を考えていると、目の前のドアが元気な声と共に開く。

「大丈夫。英国式の教会を見つけるまでの勝負だから……？」

少女が扉を開け、前を見る。

呆気にとらわれた少女が、こちらと視線を合わせたのだ。

(……？)

かくいう零次も、思考が停止していた。

巨大な安全ピンで白い修道服を修正し、いつもは被っているフードがないからか、長い銀髪が悠々と流れる。

そしてキョトンとした碧眼の少女に、思わず声を掛けてしまった。

インデックス
「禁書目録……?」

「……私の事知ってるの?」

惚けた口調で、少女が告げる。

その言葉は、以外にも心の奥深くに突き刺さったのだ。

一年周期で記憶を消さなければ脳が持たない、悲しき定めを背負った少女。

「いや、人違いだったよ」

「……………」

「……本当に人違いだったです」

言い張ると、インデックスはゆるりと笑い、

「……じゃあ私行くね。とうま! ありがとう」

家主に笑って声を出した少女を見て、言い表しようのない感覚が浮かぶ。

嫉妬でも歓喜でもない、不思議な感情。

すたすたと去っていくインデックスを、名残惜しく零次は見据えた。

「いやあ、別れはいつも辛いもんだね」

「……というか、あなた様はどうして勝手に上がりこんでいるんでせうか？ つーか誰だ？」

声を上げた少年は、どこをどう見ても一般人だ。真つ黒な髪がっんつんと様々な方向に跳ね、

学生服と名前からして、確か同じクラスに記入されていた。

珍しい名前であったから、きつちりと覚えていたのだ。

「おっと、自己紹介がまだだったね上条君」

「上条です」

「うん、上条君。今日からこっちに越してきた三鏡零次、どうもよろしくね」

軽く礼をしながら、上条家の冷蔵庫をあさる。

昨日停電があつたと表記されていたから、中身は飲み物以外完全に死んでいた。

「……夏休み初日から転入ってなんだよ……休み明けたら知らない人がいますって感じになるんじゃない？」

「しょうがないじゃん。知らなかったんだし」

食器棚からコップを取り出して、テーブルで飲み物を注ぐ。

人の家でそんな事をしているのに、気にも留めないのかと思つたら、上条は徐に口を開いた。

「それ、温いぞ？」

と。

(そこ？ せっかくボケてるのに……)

悲しい気分に晒されながらも、飲み物を注ぎ終え、テーブルに置く。

そして、コップに手を翳した。

オールレギオン
全能氷域。

身体検査で学者っぽい人が、原石だと騒いでいたのは今でも耳に

残っているが、所詮はレベル3。原石だろうと人口だろうと、大した進化はなさそうである。

噂に聞いたが、超能力者には世界最大の原石と言われている男がいるという。

仕事柄が裏仕事になりそうであるが、ぜひ会ってみたいものだった。

「おい、なんだそれ」

上条がコップを見て、ようやく上条が突っ込みを入れた。零次の手を翳した

「一応僕能力者だし」

「は？ だつてお前俺と学校同じなんだろう？」

「クラスもだよ？」

と、零次が首を傾げると、上条は驚愕を露にする。

「……えつとな？ 俺のクラスは無能力者ばかりだぞ？ 外からの転入つても無能略者つて言葉くらい知ってるよな？」

零次は頷くと、上条が続ける。

「学園都市の六割は無能力者。んでもってその無能力者の落ちこぼれを寄せ集めたようなクラスの 하나가、俺のクラスだ。……レベルは？」

「強能力者^{レベル3}だけど？」

「それつて普通にエリートじゃねえか？ ……今からでも他に変わった方がいいんじゃないのか？」

呆れた顔で、上条は説明を終える。

確かに、それが普通だろう。能力者より無能力者の方が多い現状^{レベル1}で、低能力者や異能力者^{レベル2}程度ならともかく、強能力者ならいくらでも特待生やらと引つ張られるだろう。

学園都市の研究機関も挙つて精を出しそうだ。

だが、所詮はそれ止まり。

「まあ、大差ないし」

ぼつりと、零次が囁く。

「大差ない？」

「学園都市の枠組みから見たら差はあるかもしれないけど、僕からしたら大差ないよ。学校が変わるうが研究者が変わるうが、人が変わらないと力もどうせ変わらないから」

悲しげに、零次は小さく囁いた。

超能力者^{レベル5}。

もし、それほどの力が容易に手に入り得るのなら、すぐにも転校を考えたかも知れない。だが結果も道も変化が起きないのなら、どこへ行こうというのか。

グラス内のひんやりと冷たい飲み物を一気に飲み、零次はゆるりと立ち上がった。

「今日つて確か補習なんでしょ？ 僕はないけど」

「え……？」

上条の驚いた表情が、段々と苦悶に変わっていった。

明確な言葉を往復しながら、少年が気付きたくない葛藤に襲われている。

「補習？ 補習………補習っ！」

中途半端に着ていたYシャツをしまい、血走った形相で支度を始めた。

(……なんか話し過ぎたかな)

やはり自分は潜入に向いていない気がして、ため息が出た。

「僕戻るよ？」

「ああ！ じゃあな！」

慌てふためいた上条を置いて、部屋を出る。

クーラーが壊れていたためか、中も外も暑さは変わらない。

すっ、と真剣な眼差しに変えて、零次が声を出す。先に手を離したドアが、今になってぱたんと閉まった。

「……あれが上条当麻？」

「そうだぜ」

返答があった。

ちらり、と視線を流す。

自分の部屋とは逆側の扉の前で、男が一人佇んでいたのだ。

金髪を立たせ、アロハシャツにハーフパンツという夏に持つて来いな格好に、日差し避けのためかサングラスを着用している。

無駄に長い手を、ポケットに突っ込んだ男　土御門元春が壁に寄り掛かっていた。

「あの右手つて、何かの魔術なのかな？」

不適に笑いながら、零次は問い掛けた。

右手付近には、明らかに負の流れが見えた。人に害をなすものではないが、人に幸福を分け与えない分類のものだろう。

「さあ？　んな事より、仕事、持ってきてやったぜい」

ぴら、と土御門が白い紙を手渡す。

既視感からか、また爆発するんじゃないかと心配しながら、メモ用紙程度の小さな紙を取る。

「ッ！」

「どうだ？　でっけえ仕事だろう？　結構苦労したんだぜい？」

「……僕を殺したくて仕方がないの？」

ふざけながら言うと、土御門はふと真剣な顔つきに戻る。

「いいや、元はこつちが素なのかも知れない。陰陽師としての魔術を扱った場面など数回しか見かけた事はないが、目付きはほぼだつた。」

「……こいつはアレイスターからの直属の命だ。俺の『一番信用出来る奴』に渡せと言われてな。ま、嫌なら違う奴にでも」
「別にいいけど？」

土御門の言葉を、零次は遮る。

嫌な訳ではない。第一、それでは本末転倒だろう。

本来、土御門が情報収集やら仕事やらをやったのければいいのに、

自分が来た理由を踏みにじっているようでは。

「最強に近づくには、最強と戦うのが一番早いでしょ？」
微笑みながら、もう一度紙を見る。

土御門が手渡した小さな紙には、セピアな文字でこう書かれていたのだ。

『今夜、学園都市第一位。一方通行と交戦し、戦闘データを図れ』

アクセラレータ

2話 依頼（後書き）

どうにか2話目です。

とりあえず、ノーコメントで（笑）

3話 悪&悪

能力とは、魔術や呪術、魔法の類ではない。呪物などの道具を使用するのを後者とすると、前者は主に頭の中で自分だけの現実を作り出す事から始まる。

自分だけの現実、つまりは自分が最も信頼及び執着しているものの固定的な概念を持つ事なのだろう。

それに必要なのが、演算。

普通はコンピュータなどに備わっている機能を、頭の中で全て行わなければ、能力は発動しない。レベルが上という事は、ほぼ必然的に頭の出来を表しているのだ。

レベル5ともなれば、演算能力は他の追撃を許さぬものとなる。

それほど強固な敵と対峙するために、零次は一人、部屋の中で頭を悩ませていた。

(……うーん)

学園都市最強の一方通行の能力は、常磐大の超電磁砲レールガンの次程度に有名だった。大方、喧嘩を売った不良などが広めたんだろうが……。

強能力者が超能力者に喧嘩を吹っ掛けるなど、大リーガーに小学生がボールを投げるようなもの。いいや、実際にはもっと差があるだろう。

こちらは自らの能力に関しては大雑把にしか把握しておらず、向こうは幼少のころから実験に実験を重ねて己の力など手に取るように分かるはずだ。

さらに能力は簡潔にベクトルの操作。

触れたもの全ての力の向きを操る事が出来るという。有害な物質をオートで反射するとか何とかで、街中で彼を襲った人間は瞬く間に返り討ちにされたらしい。

つまり、こちらから攻撃を仕掛けても負けるし、向こうから迫って来たらもちろん負ける。

結論から考えよう

死ぬ。

「……結果じゃない、仮定が大切だよね……」

虚ろになりかけた目を、窓の外へと向ける。

戦闘データを図れ、との事なのだから、一方的に虐殺されても仕方がないのだ。土御門の前では格好をつけてしまった零次だが、内心異常な恐怖で溢れ返っていた。

それは、果たして死への恐怖なのだろうか？

「……はあ」

クーラーの付かない室内で、汗を凍らせながら零次はため息を付く。

善戦している映像ヒジヨンが浮かばない。

考えていても仕方がない、とイギリスから運ばれて来た荷物を開けた。

(……わあ)

ダンボールの中身に、心身共に凍りついた。

高速で後退りを開始し、箱から離れる。物騒にも程がある銃器たちのオンパレードであった。

「うわあ、何これ？ 使った事ないよ？ 何考えてんの？」

愚痴を垂れながら、そつと近づく。

どれもこれも中身を確認すると、実弾が入りっぱなしな拳銃やライフルなどざらだった。

(イギリスこわあ………というかよく送れたねこんなもの)

思いながらも、零次はダンボールの奥を物色し始めた。

数ある拳銃を退け、ナイフ類を台所へ移動させる。手榴弾やら、朴刀やら、本当にスパイをさせる気はあるのだろうか。

これだけ見るとただの特攻するテロリストである。

「……結局武器しか入ってないし。非常食とかもつと大事なものあるんじゃないの!？」

最後のスタンガンを後ろに放り投げ、ばたん、と零次が床に寝転がる。

扱う程度は可能だろうが、第一位の演算を超える速度で打ち出さなければ実質効かない。

一方通行なら核の衝突でも生きていられる、くらいは遣って退けそうであった。

反射されない攻撃をするには、有害な物質を無害として通すか、後はやはり演算を超える速度で攻撃を繰り返すしかないのだ。

(有害を……無害に?)

はっ、とした表情で、零次は振り返る。

さつき適当に呼んで投げ捨てた資料を、すぐさま床から拾い上げた。

そうしてページをパラパラと捲り、ある所で止まる。

(あつた……)

思わず、零次は頬を緩ませた。

垣根帝督。

学園都市の超能力者で第二位、そして暗部スクールのリーダーでもある人物。

土御門がどれ程優秀か、痛いほど分かった。

それとも、これもアレイスターのものだろうか?

顔写真や名前、それに能力まで載っている。普通に配布される資料では、垣根帝督の顔が超能力者として上がる事はまずない。

暗部の人間だからこそ、暗部には詳しいのだろうか?

そして、さっきのメモ用紙。

『今夜、学園都市第一位。一方通行と交戦し、戦闘データを図れ』
ここには、自分が戦えとも、一人で戦えとも書かれていない。そして今はまだ午前、交渉にはいくらか時間の猶予があった。

「さて」

幸いな事に、スクールの隠れ家の大体が記されていた。

資料のありがたみを感じながらも、素早く零次は部屋を出る。手榴弾につまづいて転びそうになりながらドアの取っ手へと手を掛けた。

薄暗い一室。

大きな筒状の中にアルカリ性培養液を流し込み、白髪の間人が悠悠と逆様に浮かんでいる。

アレイスター「クロウリー」。

学園都市の最大権力者且つ、学園都市総括理事長。

推定で千年を軽く超える高齢のためか、生命維持装置を起動させていなければならない。

窓の無いビルに住まう、唯一無二の存在。

「どうしたんだ？」

ゆっくりと、アレイスターが口を開く。

表情も曇り一つなく、口調にも歪みなど欠片も見当たらない。まさに冷静、冷静過ぎる声だ。

「どうした？ それはこっちの台詞だ」

土御門元春は、至って真面目な形相でアレイスターを見やる。

「あんな資料、渡すだなんて聞いてないぜ？ 暗部の全情報が入った機密文書……一体何のつもりだ？」

軽い激怒を表した土御門に、それでもアレイスターは顔色一つ変えない。

まるで全て聞き流しているかのような、涼しげな目つきだった。

「そうだな、一言で言えば彼が気に入ったから、と言った所か。特別意味の無い、私の私情だ。例えるなら、子供の遊びと同類に捕らえてもらっても構わない」

と、アレイスターは淡々と言葉を繋ぐ。

子供の遊びだと。

単に気に入ったからだ。

常人が聞いてしまえば、嘲笑ってしまいそんな理由でも、威厳が溢れる。彼からすれば学園都市を創設したのも、その程度の思考だったのか。

「……それに、物を申したいのは私とて同じだ。あれは私から三鏡零次君に渡すように頼んだはずだったか？」

「勝ち目が、あると思うか？」

睨みを利かせた土御門へと、アレイスターが笑ってこう告げた。

「そう、私はそれが知りたいのだよ」

路地裏をずっと進み、学園都市の裏側。黒猫が横切るといってもなく不幸な予感を漂わせていた。

ある一室で、少年は足を止める。

「すいませーん！ 出前でーす」

拍子抜けな声を出した少年　零次は扉をノックする。

何も本当に出前などではなく、ただの口実。

(……いないのかな?)

扉には鍵が掛かっておらず、簡単に入り込めた。

中は開港にありそうな巨大倉庫のようになっていて、奥にはコンテナが詰まれている。

暗部の隠れ家に勝手に入り込むのは、本来自殺行為であるが、これで良い。

例えば、立て籠もりなどを諭すときはなるべく刺激しないようにする。それが上等手段だろう。

だが、取り入る場合は逆である。

一度ム力つかせ、苛立たせ、相手に自分を憎ませる。そこからこちらの価値を上げればいいのだ。

イギリスでマフィア相手に身に付いた知識だが、何だかとても切ない気分へと昇華した。

「……誰だ」

コンテナ上から、広い空間に声が響く。

金色と間違えてしまいそうな程鮮やかな茶髪に、上下共に揃った濃い紅色のスーツ。

上着のボタンを全て外しており、中から赤い生地が見えた。

足を組みながらコンテナの上に君臨する男　垣根帝督である。

「あ、出前で」
「頼んでねえよ」

一蹴りである。

最後まで言わせてもらおう事すら適わなかった。

「……と、冗談は置いときますか」

それでも笑顔で、零次は接し続ける。

「ちょっと重要なお話がありまして、ていとくんに」

ふわっ。

白い羽が舞った。そして垣根が怒りの形相で真っ白な翼を生やす。黒い光が横切ったかと思うと、良く分からない物質が壁に突き刺さっていた。それでも鋭利で、

「手短に話せ、次言ったら殺す」

次第に羽を消しながら、垣根が応えた。

ふう、と零次は一息入れる。

「……じゃあ話しちやいますよ？ あなたは第二候補スベアプランで満足ですか？」

「……………」

「他のスクールの皆さんには内緒にしてもらいたいのですが……今夜、僕は一方通行メインプランとの戦闘を行います」

垣根は聞き返そうとはしなかった。それでも、信じていない訳でもない。第一候補メインプランと出した途端、垣根は瞳を揺らしたのだ。

アレイスターと直接交渉したい垣根帝督が、食い付かないはずがない。

「……詳しく話せ」

とんっ、と地面に着地しながら、垣根が告げた。

その言葉に、零次は薄らに笑う。

「いや、参っちゃいましたよ。第一位の一方通行との戦闘だなんて、僕程度じゃ敵う相手じゃないから、色々考えたいんです……………でね、

『穴』があつたんですよ。アレイスターからのメモ用紙に」

ポケットに手をつ突っ込みながら、垣根はだまって聞いていた。

これ見よがしに名を出し、長々と語る。

「『穴』だと？ アレイスターがお気に入りの第一位の野郎と戦わせるのに、んなもんがあり得んのか？」

「普通は、無いでしょうね……だから盲点だった。アレイスターの文には、殺してはならないとも、一人で戦えとも記入されてはいない。そしてアレイスターがそれを見過ごさないとしたら、どういう事だと思えます？」

こつこつと歩きながら、零次は徐に時間を引き延ばす。

一言、協力を求めるだけなのだから、本来は時間など掛ける必要も無いし、意味も無い。

だが、きつと垣根帝督との関わりはこんな所では途切れない。

「僕の見解ですけど『殺せ』、と命じているんだと思いますよ？」

一方通行の能力は確かに凄いですけど、そこまでの代物じゃない、と見切りをつけられたのではないですか？ それに加え、あなたの未元物質ダークマターは完全に未知、ほら、比較にならないでしょ？」

まるで洗脳のように、言葉を繰り返す。

ベクトル操作より、未元物質が上だと、垣根帝督の頭脳に訴えかけているのだ。

そこまで言うと、垣根はせせらに笑った。

「くつ、ははははっ！ つまりはテメエは、第一位様を亡き者にするために、この俺を利用するつてのか？」

「？ いけませんか？」

「いいや、良い。最高だぜ、お前！ うちの面子に加えたいぐらい良い仕事しやがる！ 愉快だねえ、これで俺が実質第一位になるつて訳か？ 愉快過ぎて笑いがとまんねえ！」

垣根が大笑を始める。

高らかなその笑いが倉庫中に響き渡った。もしかしたらずっと遠く、学園都市全体に届いたかと錯覚する程の大きさだ。

(さて、成功かな?)

こちらも、思わず笑みが零れた。

だが零次には、一方通行を殺す気などさらさらない。いや、殺せると思っていないと言った方が正しいか。

いくら第二位、垣根帝督と提携して戦ったとしても、それはもはや彼が一人で戦うのと変わらない。一方通行の戦闘を間近で見る事が、零次の目的といえば目的だろうか。

「あいつの実験場、今夜だな?」

笑いが収まると、垣根が声を漏らした。

「そうですね? 知ってたんですか?」

「ああ、何度か奇襲でも仕掛けてやるうと各策済みだ」

それは心強い、とお世辞を述べ、零次が扉の前まで歩く。

「勝てますか?」

背を向けながら、問い掛ける。

挑発にも似た言動ながら、垣根は少しも躊躇わずに、

「……誰に物を言ってるやがる。学園都市最強の超能力者、第二位の垣根帝督と、最高の策士であるテムエが組むんだ。それに、俺の未元物質に常識は通用しねえ」

「お褒め頂き、光栄ですね。僕の名は三鏡零次です。それでは、こ武運を『ていとくん』」

がちや、と扉を開く。

次言ったら殺す、と言っていた垣根は、能力を発動しなかった。

(……随分と信用得ちゃったね……)

不適に、零次は笑みを壁へと向ける。

今の笑いを、正義か悪かを問うとしたら、正しく後者だったろう。

3話 悪&悪（後書き）

はい、3話目です。

今回は、何だかアレイスターの口調が変な気がしたんですが、気のせいですかね？

へんだなあ、と思ったららご指摘願います。

感想、お気に入り登録等、どしどしお待ちしております。

4話 自分だけの

既に辺りは夕暮れ。

とぼとぼとした足取りで、零次は街中を歩いていた。

（……自分だけの現実）

電気屋の前で、ふと頭を過ぎった。

理解していたはずの原理ではあったが、そもそも元が不安定だ。

『自分だけ』は理解可能。自分自身の本当に必要なもの、それを連想するって事なはず……。

では、『現実』とは？

言葉の意味としては、今、現に事実として存在している事柄。

そうになると、『自分だけの現実』は、自分が今本当に必要としているものを、現に事実として存在させるという事だ。

なんだろう。

まるで人を馬鹿にしたような曖昧な結果に、三鏡零次は頭を悩ませた。

夕暮れでも初夏の暑さなため、目の前にあつた電気屋に一歩足を勧める。

ウィーンという間の抜けた音とともに、自動ドアが開いた。学園都市といっても、そこらの自動ドアにまで科学技術をつぎ込んでいる訳でもなく、外と変わらない。

そうして素早く、扇風機のコーナーへ行き、スイッチを付ける。涼みながらも、零次は再び思考を開花させた。

（自分にとって意味の成すものを現実に表すって事で……用はイメージして具現化しなきゃならない訳で……でもそれには能力が必要でしょ、多分。するとまた自分にとって意味を成すものを）

無限のループ。

1から始まって2に移行。3に進んで1に戻る。
五分ほど考えて頂垂れながら、視線を流した。

「……あ」

何だかとても見覚えのある人を見てしまったのだ。

白いTシャツに片脚だけを切り落としたジーンズという、異様な殺気に満ちた女性。いつも持ち歩いている刀を持っていないだけ、通報されずに住んでいるようだった。

黒い髪を後ろのりボンで止めている。周囲の人が間を開けて通るのは、溢れ出す潜在性ポテンシャルと奇抜な服装ファッションのせいだろうか。実際、知り合いでなければ自分も絶妙に距離をとっていたかも知れない。

その女性が、時折開け閉めしながらじいっと冷蔵庫を見つめていたのだ。

「……神裂さん？」

零次は、そつと女性に声を掛けた。

今まで冷蔵庫の中を食い入るように見ていた女性が、勢いよくそれを閉める。

「はい!？」

まるでこちらの存在に気づいていなかったかのように、神裂はびくりと背中を振るわせた。

取り乱した神裂は何事もなかったと言いたげに、

「……零次、何か用ですか？」

と、冷静に大人の態勢を保とうとしているのだ。

大人といっても、彼女は十八歳であり、零次とは二つしか違わないが。

「そんなに隠さなくても……」

「隠していませんっ!」

零次の言葉に、冷蔵庫を背に耳まで真っ赤にして反論した。

もはや手遅れであり、頑張っつて隠そうとしているのが、何とも哀れみをそそる。

「別に神裂さんがイギリス聖教か天草式にでも言えば買ってもらえるんじゃない？ それよりポケットマネーでも買えそうだけど……」
「欲しくなんかありません！ 別に携帯電話が使えるようになったから、次は新しいものに挑戦しようとなんか、全然考えていません！」

否定をしながら、神裂は動機を暴露する。

こういう人は嘘が下手なんだなあ、と零次は改めて認識した。

そうして、神埼が間を置いて切り出したのだ。

「ごほんっ……………所で、あなたは何をしています？ 土御門から聞けば、スパイ活動とは夜が本番との事ですが、戦闘の場場合はぜひ活用してくださいね？」

「……………」

神妙な顔で告げた神裂に、零次は首を傾げる。

ぜひ活用、と言うからには何か使うもの。それで自分が今神裂からもらったもの……………。

(はて？ そんなものあったかな？)

戦闘に活用するものなのだから、何か武器のような。

武器？

うだるような暑さの中、垣間見たダンボールの中身。銃刀法違反など疾うの昔に置き去ってしまったかのような、武具の数々。

「神裂さんが詰めたの？ というかどうやって送ったの？ あんなの空港が通してくれるとは思えないんですけれど……」

零次の問い掛けに、神裂はゆつたりと微笑した。

本当に微かに唇を吊り上げているだけなので、何だか馬鹿にされている気がしてしまふのは仕方がない。

「ええ、各国から取り寄せた武具です。あなたの手に合わせてオーダーメイドで作らせ、土御門に運んでもらいましたが？」

やっぱりあいつか、と零次は落胆した。

(嬉しいけど、今日は使えないよね。銃弾とか返って来たら洒落にならないし…………)

垣根帝督とは、表面上協力であるが、戦闘においては九割ほど彼に頑張ってもらうつもりである。

こちらから一方通行に直接やる事と言えば、その辺の石ころを投げつけて注意を引く、程度の事しか今の所やるつもりはない。

他にはやらない。全て返って来ると分かっているのに攻撃するなんて、ただの馬鹿がする事だろう。

ゆえに、零次は攻撃しない。

自分が天才というつもりもないが、場を弁えると言ったら聞こえがいいだろうか。

「……そうだ」

小声で、零次は軽く手を鳴らす。

先に悩んでいた疑問を、神裂に投げ掛けたのだ。

「自分だけの現実、って何だか分かる？」

「……………言いたくはありませんが、学生の身分で引き籠もるのはあまりに非社会的ですよ？」

「違うから！！ 要は僕の、僕だけの誰とも比較出来ない力とか個性とかさ！ そうなの。できれば詳しく」

そうですか、と告げ、神裂が考えに耽り始める。

考えなければ出て来ないというのも悲しい話であるが、自分では分からないので人の力を借りるしかない。

永遠に感じる時を感じながらも、零次は黙って答えを待った。

「……まだ？」

神裂が目を瞑ってから、十分は立った気がする。

石像のように動かないからと言って、どうせ神経を集中させているだけなので、近づかない。

と、いうよりも近づけないのだ。

どんな状況に置いても、周囲を感知するのが、聖人ほどの魔術師である神裂火織なのだから。

正直、羨ましくないと言えば嘘になる。

でも、人を妬んだ所で、結局は何も変わらない。愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ。つまりは、大いなる神話のごとき根から理解しなければ、何も掴めやしないのだろう。

「やはり……一つしか思いつきませんでした」

断腸の思い、といった様子で、神埼が瞳を開けた。

「一つあったの！？ 何！？」

「あ、ま、待って」

瞬間。

周囲の視線が、一斉にこちらを向いた。

大声とか、冷蔵庫コーナーの前だとか、そういった事ではないのだろう。

思いつく事と言えば、神裂に肩を思いっきり揺さぶっていた事か。

(あれ？ 何だか半端じゃないくらい既視感があるような……)

考え始めると、近くの人が携帯を取り出した。

電話だと仮定して、ジャケット風紀委員が警備員。アンチスキル

何やら周りの感じからすると『嫌がる女性にセクハラしている高校生』と言った外見になっているようだ。恐らく、神裂が顔を真っ赤にしている事が原因の一つのような気がする。

「あ、えつと、あの……」

零次は言葉を詰まらせる。

両手を振って身振り手振りで、誤解だと伝えようにも、言葉が出ない。

一応潜入している身で、二度も拷問染みた質問攻めを受ける訳に行く訳がないのだ。風紀委員のあれは、質問というより確定事項であつたため言い逃れのしようがなかったから、一応は除外するとして……。

「ああ、もう！ 行くよ！」

神裂の手を引いて、すぐさま電気屋を飛び出した。

とにかく、路地の裏。

クリーンなイメージの学園都市で不良の溜り場に軽く腰を掛け、聞き返す。

「一つ分かつたのつて何？」

焦る気持ちを抑えられずに、零次は神裂へと訊く。

超能力者は、演算の強さ。

レベル5の序列は、アレイスターが定めた候補順だとする。

そして、学園都市最強の一方通行が一位で、演算も最強だと仮定した場合。

演算能力を無理やりにも引き伸ばせば、レベル5に到達出来る可能性も出てくる。

あくまで、可能性の話である。

実際レベル5だと認定するのはアレイスターであるし、そもそも演算を引き伸ばさなければ、そうはならない。

だから、そのための『自分だけの現実』なのだ。

今、心境としては何となく能力が使えている状態であつて、決して完璧ではない。

「やはり……」

神裂の口が、ゆっくりと動く。

思い渋ったように、ふっと顔を顰めた。

(やはり何?)

ごくり、と零次は息を飲む。

先と同様に時が止まったかのごとき沈黙の中で、神裂が言葉を発した。

「魔術……じゃないでしょうか？」

本当に時が止まってしまった気がする。

ああ、案外本当に止まっていたのかも知れない。

魔術元素を科学能力に加える、と無茶な事を言っただけだ。

科学音痴とやらを通り抜けた、間抜けな証言。

「あのね？」

「はい？」

「土御門から何か聞いてない？」

「……特には」

今までの興奮が、一気に冷める。

まるで氷を熱湯の中に入れたような、一瞬であった。ふわふわと漂ったそよ風も、祝福とは逆の悲哀を映す。

(こつこつというのを天然って言うんだろっね……)

心中でため息を付き、千鳥足で路地を出る。

「どうかしたのですか？」

「別にー、神崎さん、そうやってたらモテそうだと思っただけです」

「」

適当に惚けた口調で、零次は手を振る。

「なっ！ 何を！」

「いつか良い人見つかるといいですねー」

ふらふらと本当に覚束無い足取りだった。希望がそがれたような、微妙なバランス。

(手掛かりなしか……)

自分の事を人に聞いた時点でどうかと思うが、期待し過ぎたのは

事実だろう。

神裂は科学に関してはそこらの一般人以下であり、あの口振りではきつと最近までは携帯電話すら使用不可だったのだ。

魔術を科学に加える。

つまりは、『自分だけの現実』において、魔術と科学を複合させると言う事。

多分、いいや理論上は絶対に可能なのだ。だが、それをやってしまったら、一度目で腹部の欠陥が破損、二度目にはほぼ確実に死ぬ。幸いな事に、オールレギオン全能氷域も今まで使っていた魔術と属性は変わらない、『自分だけの現実』で複合出来る、と一種の催眠を起こして使えば良いので、簡単に出来てしまう。

きつとそれは、魔術の属性や特性など関係なしに使用できるはずだ。

だったら、なぜ土御門は魔術と複合させないのか？

前に言っていた。再生能力があるから何回か魔術　陰陽師としての力を使っても大丈夫、と。

それは、使った事があるから内部の破損の痛みを知っている訳だ。つまりはその後に使うときにも、科学技術と複合すれば良いのである。しない理由は恐らく、負担が大き過ぎるから。

日は落ちて、月が昇りだした。実験までは残り一時間もない。歩いていけばちょうどいいだろうと、零次はゆっくりと実験場のある方へと向かう

4話 自分だけの（後書き）

今回は自分だけの現実の勝手な独自解釈ですな。

もう一つ勝手な解釈は、神裂が魔術の副作用について知らなかった事ですが、独自理論的には知ったのは御使墮しの直前だと思っ
ています。

ちなみに、次回はついに？ 全能氷域&未元物質VS一方通行です。
レベル3、レベル5、レベル5と一人だけ妙に肩書きが小さいです
ね。
何話掛けるかもまだ未定だったりしますが（笑）

5話 戦闘

古くから、人間には二種類の人間がいるとされる。

従う者と、従わせる者。

それらの違いとはなんだろうか。

従う者が弱いという訳でも、従わせる者が強いという訳でもない。強いが弱いかではなく、戦術、策、思考で決まる。それでも、頭が良い事とはまた違うのだ。

命懸けで自らの命を守れるか。

死んでさえないなければ、何度でもやり直せる。

では逆に死んでしまえば、何もやり直せない。

自身味方問わずに、守り抜く思考こそが従わせる者に必要なのだ。

辺りは暗い。

綺麗な月光が足元を照らしてくれているせいか、あまり遅くには感じなかった。

夜空にはいくつもの輝く星があり、それが勝利を祝福しているのか惨めな死を嘲笑っているのかは、決して読み取れない。

「やあ、ていとくんさん」

零次は、軽く声を掛ける。

取り繕うのが面倒になったので、零次は少し素を出しながら笑い掛けた。

「テメエ『くん』の後に『さん』付けるってどんだけ暴拳だと思っ
てやがる。とつとと外しやがれ」

憤怒しながら、垣根帝督は瞳をぎらつかせた。

心なしか、その言い草では『ていとくん』という愛称は丸々了承されている気がしてくる。

実際、渋谷と了承しているのだろうか。

「ま、それはそれとして、早く入りませんか？」

鉄格子のように厳重な場に、零次は立った。

ポケットから鍵を取り出して、通路を空ける。周りをフェンスで囲まれたコンテナだらけの実験場だが、別に攀じ登らなくても通路程度確保出来るのだ。

「ふむふむ、やっぱり不気味ですね」

苦笑して、扉を完全に開けた。

見渡しながら二人は、実験場に足を踏み入れる。

数秒後、何の変化も見られない実験場で、零次は退屈そうに言った。

「ていとくん？」

「ああ!？」

「飛んで行けば早いんじゃないですか？」

「……狙い撃ちされんだろうが」

頭を掻いて、垣根帝督がぼそりと囁く。

会話を続けてやっと分かった事ではあるが、垣根の口調は機嫌では変わらない。

要するに、機嫌が悪かろうと良かろうと口調は大して変わらない。常に苛々しているように見えて、どうにも上に立つ器ではないかな、などと零次は失礼にも考えていた。

コンテナの隅に隠れながら、零次は結論付ける。

「大体なあ。第一位様と五分五分で優劣の差に持って行けんのは、俺以外にいないぜ？ 第三位じゃ相手にならねえ」

「じゃあ、ていとくんは超電磁砲に楽勝って事？」

「当たり前だ。俺の未元物質に常識は通用しねえんだよ」

軽く決め台詞を刻みながら、学園都市第二位、垣根帝督はかぶりを振った。

深夜の空間には、その言葉が異常に響く。

「……いいですね」

「何か言ったか？」

前に行く垣根が振り返って、零次へと問うた。

「それ、いいですねって」

「は？ と垣根が沈黙した。

「だから『俺の未元物質に常識は通用しねえ』って決め顔で言えるていとくんなら、考えてくださいよ。僕のキャッチフレーズ」

「……テメエは本気で殺されてえのか？」

微笑んだ零次に対し、垣根がいささか戸惑いを見せた。

初対面るときよりは砕け口調になっていて、さらにそんな要求されれば誰でも戸惑うだろう。

心底面倒そうに、垣根が口を開いた。

「……つーかお前の能力知らねえし……あー、お前と来たの失敗な気がするんだがどうすんだ？ 何が最高の策士だ！ 自慢げに言った俺が恥ずかしいだろうが！」

「そんなの知らないですよ！ 勝手にそっちが買い被ったんでしょ

？」

軽く、二人は視線が火花を散らす。

「なんですか、ていとくんの癖に」

漏らした言葉に、垣根がびくりと肩を震わせた。

そして、透き通った黒い眼差しで、こちらを食い殺すように睨む。

「その呼び名も止めやがれ！ 聞こえてねえとも思ってたのか？

俺はお前が使える奴だと思っ……」

突然。

垣根の口が止まり、視線が遙か上に行く。

言い争いが終焉となり、夜特有の静寂のときが流れる。

「よオ……」

もちろん、一瞬だけ。

静寂を打ち壊すように、一言、夜に声が轟いた。

聞いて、ようやく零次も視線を向ける。

その人物を表すなら、白。尋常ではない白髪を垂らし、黒地に軽く白模様が入ったTシャツを着て、不気味に笑っている。

学園都市の 全世界でも最強と唱える人間も、あるいはいるかも知れない。

「あ、出前」

「それは良い、つってんだらうが！」

素早く、脳天に衝撃が走った。

後頭部の叩かれても音がなるだけであまり痛くない場所に、垣根が正確な速度で平手打ちを叩き込まれたのだ。

まさに、お笑いコンビが求める最高の突っ込み。

「……さすがていとくん。笑いの常識も通用しないと驚きです。それに昼間よりも更に突っ込みの速度が上がっているとは……」

「勝手な事言っでんじゃねえ」

「『俺の爆笑に定石は通用しねえ』ですか？ これ終わったら僕と

漫才やりませんか？ 大儲けできそうじゃないですか」

「おいコラ。今はふざけてる場合じゃ……」

こつん。

貧相な音が、聞こえた。

凄まじい速度で、上空から小さな石ころが一つ、自分と垣根の間に入りこんだのだ。まるで矢でも降り注いだような、一閃。

爆音が鳴り、コンクリートが割れる。

「おオ、クソムカつく第二位じゃねエか……今夜の相手はオマエかア？」

コンテナの上で、アクセラレータ一方通行が不適に笑う。

それを見て、未元物質も戦闘態勢に入った。

ふわっ。

既視感とともに、垣根の背からは六枚の白い翼が生える。純白な羽は、まるで天使のようである。

見下ろす一方通行と見上げる垣根帝督が、今正に死闘を繰り広げようとしているのだ。

だが、場違いな人間も一人……。

「それじゃ、任せます！」

垣根が振り返る前に、零次は逃亡を図る。

一方通行の顔を満足に確認しないまま、硬いコンクリートを蹴ったのだ。

「あ、テメエ！ 何逃げてんだ！」

「言い忘れましたけど、僕強能力者なんで、化け物二人はそちらで勝手にドンチャンやっちゃってくださいねー」

全力疾走。

両手を素早く振り、迅速に足を前に出す。

捨て台詞と思える言葉を吐き捨て、零次はその場から走り去っていたが、不思議と一方通行も追って来ようとはしなかった。

5話 戦闘(後書き)

いよいよ？ 始まりましたが、主人公は早速逃げます。

6話 第一位VS第二位

「ンだア？ アイツ何しに来たんだ？ 第二位様よオ……」

一方通行が、視線を逸らす。それでなくとも、今は暗黒が漂った夜である。ぎゃあぎゃああとうるさかった零次が去ると、自然と静けさが増した。

実際、それは無理が無い。

学園都市最強の超能力者。その中の上位一位と二位が今、にらみ合っているのだから。

(あの野郎、絶対あとでぶちのめしてやる……)

垣根は、そう心に誓う。

逃げ出した少年が戻って来る気配などない。つまり、零次自身の存在価値としては、ただの道案内という事だ。

第一位である一方通行と、第二位である自分とを戦わせて、高みの見物でも決め込むつもりなのだろう。恐らくは自分が負けるか、良くても手傷を与えられる程度、と考えているに違いない。

だが、

(……それは間違いだがなあ)

垣根は、不気味に笑みを浮かべた。広げた六枚の羽で空中を叩き、瞬時に一方通行よりも高く飛び上がる。

未元物質を扱うときにだけ現れる、不思議な翼。

零次の言う通り、未元物質については自分ですらほとんど理解してはいない。生まれ持った能力のその片鱗を、垣根はただ振るうだけ。

努力はした。能力を開発されてから今の地位まで、上り詰めるまでの努力はした。一方通行、未元物質、超電磁砲、原子崩し、心理掌握、名のある超能力者だろうと、元はただの人であったはずだ。

かくいう、自分も。

その理念も、今は必要ない。

「あいつは気にするな。お前はただ俺と殺し合え。そしてそこらでくたばってりゃいいんだよ！」

空中で、垣根は羽を羽ばたかせる。先手を取れたのはこちらではあつたが、一方通行も軽く手を向けた。

「殺し合う？　面白エ。テメエと俺の差って奴を思い知らせてやるうかア？」

挙げた手を、一方通行が振った。

巻き起こった烈風が、竜巻と姿を消し合う。一方通行に烈風が当たろうとも、全てこちらに返って来るのだ。

(……これが反射か)

避けながら、垣根は思う。

初見に初撃だが、こんな程度で傷を負わせられるとは思っていない。反射が全て跳ね返すなら、一方通行は呼吸する事すら出来ないはずだ。

もちろん、もっと根本的に言えば体温を取り入れなければ、最低限の日の光を浴びなければ、いつしか人間として終わる。

でも、一方通行は生きている。それは同時にフィルタの存在を表しているのだ。

(なら……解析するまで)

思考を働かせながら、何度も烈風を放つ。

一方通行は遊んでいる、今ならベクトルを変換させ、こちらに接近する事も可能であるが、ゆったりと唇をほころばせながら竜巻を放っている。

双方打消し損ねた烈風と竜巻は、両者を襲うが、一方通行に向かった烈風はこちらに返って来るからか、回避行動は倍になってしま

未元物質の翼で右往左往と加速し、垣根は竜巻が解ける風圧を肌で感じ取っていた。

「どオしたよ？ 調子でも悪いんですかア？ 第二位さんよオ！」
声と同時に、一方通行の手からは竜巻が放たれる。四本程度が合わさり、更に巨大になった風。

台風のような暴風は、辺りの空気を丸ごと掴んでいる。

その風が、既に垣根の目の前まで迫っていた。

「悪いいな……一方通行」

ぼつりと、垣根は呟く。

確かに、これほど大きければ、避ける事も易々と相殺する事も、今までは出来なかっただろう。

「もう解析済みだ」

垣根は羽を振るう。

鋭い烈風が巨大な竜巻を切り裂き、一方通行に向かうのだ。べ

クトル操作で出来た風ならば、結局は解析が終われば壊せる。

「ンだア？ そんなもんがこの俺に ツー！」

案の定、一方通行は吹き飛んだ。垣根の放った烈風が一方通行の腹部に直撃する。一級品の刃物よりも数段切れ味の増した風を受け、一方通行が吹き飛んでいく。

反射の効かないという現実には、一方通行が目を見開きながら後方のコンテナへと体を打ち付けた。

「ぐっ……」

血反吐を吐いて、よろよろと立ち上がる。

「フンツ。これが第一候補かよ……笑わせるな」

起き上がった一方通行に、空中からゆったりと垣根は近づいた。
罵倒しつつも、苦笑が込み上げる。

自身が最強の証を、すぐにでも作り変えられるという、余裕の笑

み。

「……本当は太陽光でも使ってやろうかと思ったが、生憎今は夜なんでな。テメエが吸い込む酸素の量、質、濃度を完全に把握して、それと何一つ変わらない物質を送り込んで遣ったんだよ。故にお前は食らう」

話を終え、再び烈風がコンテナを切りつける。切り刻まれた鉄屑の回りには、一方通行の姿はない。

足に触れた地面のベクトルを変えて、空へと逃げていた。

「さすがに、はええな」

垣根が上を見る。

感服気味な垣根は、両羽をさらに大きく伸ばす。

終わらせよう。

ニヤついた垣根は、最大限に翼を折り曲げた。さっきとは違い、

一方通行の命を奪う、最大風力。

(ハッ、これで俺が第一候補か……くくっ)

折り曲げた羽を、一気にぶれさせる。

何となく、垣根にはもう見えていた。

一方通行の腸が裂け、自分がアレイスターと直接交渉する場が。

風切り音が上空へと突き進む。

これで全てが終わり、全てが始まる……はずだったのだ。

「……こんな程度かよオ」

ふと見ると一方通行が、笑っていた。

酷くつまらなそうに。

キーン、と高音を奏でた風切り音が近づく風圧を、垣根は感じた。勝利を確信した直後に、自身の放った最大風力が、速度を上げて垣根へと落ちている。

「ぐっ、があああー！」

真っ赤な制服がさらに赤く染まる。

咄嗟に腕を交差し、ダメージを最小限に抑えたが、それでも威力は絶大で風が通りすぎたころには垣根はコンクリートに倒れていた。「……よオ、第二位さん？」

覗き込むようにして、一方通行の姿が垣間見える。

傷はあるが、満身創痍には遠い。

そしてこちらは、回避すら行えずに自らの全力をまともに食らったのだ。今すぐには確実に動けない。

「テメツ……何しやがった」

苦しそうに、垣根は呻く。

「オマエは良くやったもんだなア、おい。この俺に一撃与えただけで、それはもう神にも等しいんだぜエ？ 解析が終わった？ それがどオしたよ。例えテメエが俺の隙間を狙っても、こっちはそれを踏まえて再演算し直せば良いだけだろオ？」

チツ、と垣根は舌打ちをした。

一撃与えたときから、もしそこまで考えていたとしたら、さすがは第一候補としか言い表しようがない。

ああ、もう終わったのだ。

考えが及ばぬ別の空間へと閉ざされる。きつと、それが死。

「じゃあ、いい加減楽になれ」

一方通行の拳が迫る。

こちらに触れた瞬間、血流を逆に回されて死ぬのだろう。だから、垣根帝督は覚悟は出来ていた。暗部に入ったときから、覚悟していた。

そつと目を瞑る。

一方通行の声はもう聞こえなかった。

勿体付けて、ゆっくりと殺すつもりなのだろう。

だとしても、遅過ぎる。

「……は？」

目を開けると、一方通行はもうこちらを見てはいなかった。
むしろ逆方向。

子供が新しい玩具を見つけたときのような、愉快げな笑みをして
いる。

その先。

学生の夏服に身を包み、下もどこの高校のものだろうか。日本人とは思えない淡い水色の髪を引っさげた、これまた愉快げに笑う少年。

三鏡零次が、拍手をしながら近づいて来ていたのだった。

「はい、お二人さん良く頑張りましたね。おかげでデータはばっちり取れましたよ？」

言いながら、零次が何やら大きな箱を見せ付ける。

まるで古いビデオのような機械だ。

反射的に、垣根は叫んだ。

「……テメエ！ 早く逃げやがれ！ 俺はもう駄目だ、とっとと行けっつてんだ！」

自分自身、何を言っているのか垣根には分からない。幾度も人の命を壊して来た自分が、今度は救おうと叫んでいるのだ。

信用性に欠ける言葉。

事実そうだろう。自分が学園都市の超能力者、そしてスクールのリーダーとなるまでに、一体何人の人間を殺めてきたというのか。思い返すのも馬鹿馬鹿しいほどの量だ。

そんな垣根の放つ声に、零次が耳を傾ける事はない。

「一方さんもアクセラご苦労様です。もう今晚の実験は終わりだと思いますよ??」

「関係ねエ！ こいつがムカつくから俺はこいつを殺すんだ。それが普通だろオ」

一方通行の言葉に、やれやれと零次が肩を竦める。

そして、手に持っていた機械を置いた。

「……その人にもまだ死なれちゃ困るんですよ。どうしても殺すというなら」

「……」

周りを、冷たい冷気が舞う。

空気に流れた冷気が白い粉となり、限られた空間にすうっと広がっていく。

それは、到底強能力者に出来る芸当ではなかった。あるいはほかの超能力者をも……自分をも超えているのかと錯覚してしまうほど。微笑みながら、冷気を纏った零次が告げる。

「あなたはとても運が良い……」

「何だ？」

新しい獲物を見つけた一方通行が、頬を緩めた。悪魔にも類似した視線で、ひんやりとした冷気を眺める。

「だってそうでしょ？ 僕が一生に一度、使うかどうかも分からない能力を見られるんですから」

何も言わない一方通行に、遠くから零次が、右手を翳す。まるで何かを掴む前の動作のような、神秘的な構えだった。

6話 第一位VS第二位（後書き）

あっさりと、ていとくんは敗北です（笑）

原作でもミサカネットワークで繋いでいた一方さんに反射されたので、万全な一方さんでは簡単に解析も再演算されてしまいます。

ていとくんが油断していたせいもありますが……。

とにもかくにも、主人公登場です。

というか、段々変なあだ名が増えていきますね……きっとこれからも増えますがね。

7話 悪党

静寂よりも更に深い静寂が支配する、夜。

学園都市の第一位、一方通行が、今日の前にいる。狂喜の表情を浮かべ、にたにたと笑っているのだ。

直後。

(ツ！)

零次は、頭へと激痛が走るのを感じた。脳内の血管が逆流しているかのようで、酷く頭が熱い。

今まさに、零次が扱っているそれこそが、魔術と科学の複合。『自分だけの現実』によって想像しうる、自らの能力を魔術で更に上位まで引き伸ばした結果。

(……さて)

啖呵を切ったのは良いが、状況少し厳しい。

一方通行と倒れている垣根帝督との距離は、手を伸ばせば届く程度。もし一方通行が触れれば、血液の逆流により見事な死体が出来上がってしまう。注意を引きつつ、どうにか垣根を回収して逃亡を図りたい。

それが本心のはず。

(……)

一刻も早く逃げるなら、立ち止まっている暇などあるはずもない。今すぐにでも行動を起こし、垣根帝督を回収しなければならぬのだ。

それでも、使いたい。

天使にも迫る絶大な演算と能力。

自分の全てを投げ打つ覚悟で手に入れた力を、目の前の標的に使いたくて使いたくて仕方がないのだ。求めていた力の形が一瞬でも入手できた事が、嬉しくてたまらない。

「イイねイイね最高だねエ！ オマエ、もしかして第二位の野郎よりもつええんじゃねエかア？」

一方通行が挑発的に笑う。

自身に傷をつけた垣根の羽、それを上回っているかも知れない零次の力を、ずたずたに引き裂きたくて溜まらないようだった。

「……glacies281」

気付けば、小さな声で零次は名乗っていた。

魔法名。

神裂やステイルなど、絶対悪の教会に属している魔術師は皆持っている二つ目の名。

別名、殺し名とも呼ばれている、教会を知るものからすれば、絶対に名乗ってもらいたくはない名だろう。

そして、自分のものは、永遠を凍結する者の意を成す、本当に下衆な名。

「あ？」

「ちよつとしたおまじないだから、別に気にしなくていい」

首を傾げた一方通行へと、零次は淡く微笑した。それは自嘲気味な笑みも含む。

今の自分は、結局魔術師でも能力者でもない。つまりは魔術でも科学でもない、完全な亜種。善も悪もなく、あるのはただの好奇心。

「あ？」

一瞬のできごとに、学園都市の最強も、少しの間呆気に囚われていた。

零次は、ほんの少し右手を右に逸らす。向けていた右掌で一方通行ごと視界から隠すように滑らせ、通り過ぎらせただけ。

びきつ。

少しの動作だけで、一方通行の足元から亀裂音が走った。

「……面白エ」

一方通行が言い漏らす。

その足元は完全に凍り付いていた。その水分の欠片も存在しないようなコンクリートが、綺麗なガラスのように変貌する。

瞬く間もない速度で数メートル先から、零次は空気中の水分を凍結させたのだ。

空気に漂う水など、強能力者では到底扱い切れる代物ではない。液体化されているものを凍らせるのが精一杯のはずである。

「面白えええエエエエエエエエエエエエッ！」

絶叫。

そして跳躍。

けたたましい轟音と亀裂音で、コンクリートは元の灰色へと戻る。

一方通行のベクトル操作は、身に触れたもの全ての向きを変え、反射させる事が出来るはずだ。それも、靴や衣服問わず、ほんの表面上触れたと思える一瞬だけしか時間として必要としない。

だけれど、足元は凍った。

一方通行を避けた訳でも外れた訳でもなく、足下の地面は凍ったのだ。

(……へえ)

段々と、全能氷域についての理解が深まってきた。

人体を内側から凍り付かせる事は出来ない。強度がどうこうでなく、人体を離れた場からすぐに凍らせる事はできないようである。

ベクトルの変換で速度を上げる一方通行を眺めて、零次はもう一度右手を振るう。

ぴたりと、一方通行は静止した。

音速にも近いベクトルを変換した速度が、完全に止まったのだ。
手、足、首、頭、腰。

内側ではなく、輪状になった幾つもの氷が、一方通行の行動を蝕んでいる。

「何だ？ 何度も効くかってんだよオ！」

再び、氷は砕ける。

全能氷域でベクトル操作を上回れるのは、一瞬。

それに表面だけ凍らせた所で、効かないのは明白。内部を凍らせるのなら触れるのが普通だが、反射の作用で皮膚にぶち当たる前に腕が押し折れてしまうだろう。

(……………あ、無理だわ)

きつぱりと、零次は諦めた。

今までの考えを改め、冷静にミサイルのように突っ込んで来る一方通行相手に身を翻す。

「ごおん。」

後方のコンテナに、一方通行が当たったのだろう。

ちらりと背後に目をやり、駆ける。

戦闘の最中でも横たわっていた垣根帝督に、すばやく肩を貸した。
「ていとくん。早く逃げるよ？」

倒れたままの垣根帝督へと、零次は声を掛けた。息はあり、怪我といってもすぐに歩ける程度には回復するだろう。

「……………あいつとの勝負はまだ終わってねえ」

「いや終わりました。ていとくん完全敗北です。確実に負けました。トドメを回避できただけマシだと思ってください」

ぼろぼろの垣根は、いささか不満そうだった。

舌打ち混じりに言う。

「……………だったらテメエが続ければ良かっただろうが。俺の見立てじやあお前の能力に反射は効いちゃいなかった。あのまま続けりゃ……」

…」

「ていとくんの癖に適当な事言わないでくださいな」

くすくすと、零次は頬をつり上げる。

そろそろ、垣根帝督には割と本気で零次は黙って欲しかった。

頭痛が酷い。

超能力者という人種がもし、これほどの頭を持っているとしたら、と考えただけで笑えてくる。

「ああ！？ 大体あいつの殺し依頼したのお前じゃねえか！」

「負けた癖に偉そうに言わない！ 第二位コンプレックスを直さないと一生勝てないですよ？」

誰がコンプレックスだ！ と垣根は叫び声を上げる。

悲痛の叫びですら、今は強がり程度にしか聞こえなかった。

文字通り、重症。

未元物質は未知の物質を作り、法則を壊す能力だとしたら、全力のそれを反射された垣根の傷は、そのまま帰ってきたも同然。

「……それにさっきも言いましたけど、本当に長く持たなそうです。演算が異常に上がった反動が分らないですけど、めっちゃくちや頭痛いですもん。多分そろそろ時間切れですって」

すたすたと、零次は歩を進める。

下らない言い争いをしている間にも、一方通行はこちらを探しているはずだ。

爆音と土煙でどうにか撒いてはいるが、見つかったら終わる。

「羽、生やせんせん？」

「まだ無理だ……っーか少し休ませろ」

言う通りに、垣根をコンテナを背もたれに座らせる。

歩いて出口を探し出し、この場から去る体力など残ってはいない。脱出には、未元物質の力に頼るしかないのだ。

(……………うぐっ)

頭痛と目眩が同時に起こる。

いつ来るか分からない魔術と科学を複合した副作用よりも、こちらの方が参る。何せ痛みの最中は、演算どころがまともな思考すら働かない。考える事ができないというのは、どう動けばいいか、その考えすら見失ってしまうという事。動く事すら間々ならない状態になったなら、どうして戦う事などできようか。

「……置いて行け、今からでも間に合うだろう？」

柄にもない表情で、垣根帝督は呟いた。

「死亡フラグを立ててくださいよ。折るの大変なんですから」

「少し休んだら俺が足止めする。その隙にとつと行きやがれ」

聞こえているのかいないのか、垣根は零次の言葉を無視した。

まるで独り言のような、寂しそうな声である。

子供が母の帰りを心配するような……強張った表情。

「だから勝手な事を……」

「俺の死を確認したら、縁担ぎにでもスクール次いで見るよ。お前ならあいつらもうまく回せんたる？」

零次の言葉を、垣根が遮る。

呼吸を整え、垣根は戦地に向かう老兵のような、割り切った顔で立ち上がった。

(何で……)

巻き込んだのは自分だ。

この件を知らなければ、垣根帝督は無駄な傷を負うことなく、もっと長生き出来ていたはずである。

利用しようとした。

零次の頭に、それが重く押し掛かる。

垣根の目付きは、明らかに信頼を示していた。そうでなければ、自身所属の暗部名など出すはずがない。

「あんた……何でそこまでするんですか？ 昼間は気付いていた、あんたは僕が利用するって分かって敢えて乗っていた……なら、

裏切ればいいじゃないですか！ 自身の保身を考える、それが普通なんじゃないんですか！？ 僕には分からない！ 自己犠牲までして誰かを助けようだなんて、このご時勢、考えるだけ無駄ですよ！」怒りを露にして、零次は激昂する。

一方通行にこの場が知られたらとかそう言った事は考えていない。ただ、死なせてはならない気がしたのだ。目の前の男の根は、決して悪人ではないから……。

そして、

「何寝言言ってやがる」

と、真正面で、一度垣根が髪を掻き揚げた。

その一言で、声が出ない。

これも、未元物質の力なのだろうか？

去り際に、垣根はゆっくりと口を動かす。

「テメエは、俺を助けただろうが」

それが、静寂の夜に響く。

(……はい?)

耳を疑った。本来の突っ込みの仕事を忘れて、ボケに転向したのかとさえ思える言動。

今すぐにも医者呼び出さなければ死ぬのではないかと感じる違和感。

かぶりを振って、垣根が言った。

「……チツ。テメエが下らない事ばっか言うせいで、どうやら俺もおかしくなっちまったらしい どれよ。それとも、俺が負けるとでも思ってたのか？」

微笑して、垣根はゆらゆらと歩いて行く。

今にも倒れてしまいそうな足取りで、自分の真横を通り過ぎたときでも、零次が止める事はなかった。

7話 悪党（後書き）

うーん。今回も特に言う事はないんですが、一応この話でもまだ一日経ってないんですよ？ 風紀委員に捕まった一話が午前8時程度だったとしても、まだ半日と数時間しか経ってませんのです。

この小説終了のころには一体どれほどの長さになってしまっただろう？

ちなみに魔法名の数字は適当です。

8話 覚悟（前書き）

9 / 26 にここから編集を始めます。

これ以前の話は既に編集が終わっていますし、これの後の話も流れも変わらないと思います。ただ地の文やら描写やら納得が行かなかった部分なので……。

8話 覚悟

人はどうして、他が為に命を掛けられるのだろう。

人間など、所詮自分が可愛いだけの脆弱で短絡的な生き物だ。恩義を着せた所ですぐに忘れてしまうような、その程度の存在。

だからと言って、自分がそれを上回る高等な人間だとは、一方通行は思っていないかった。

いいや、最近までは思っていたのだろう。

妹達シスターズだろうと研究者だろうと、己が強くなる為の生贄でしか、彼にはなかったはずだ。

人を殺したくない。

彼の奥底に眠る本心は、どうせそんなものだろう。

本当に奥底、だから誰も……本人でさえ妹達を一万人以上殺しても気付けないような、ほんの小さな綻び。

考えながら、一方通行は目を見張った。

「……何しに戻って来たんだア？ オマエ」

確か、先程も同じような言葉を口にした。

逃げた二人を探さなかったのは、一方通行の本心がくすぶっていたからなのだろう。

再び馬鹿げた実験を止める為に、いつか現れて欲しいという願望。

だが、それは案外早かった。

コンテナ上に足を組んで退屈そうに座っている一方通行の、更に前方。

傷つき、所々烈風で破れた真っ赤なスーツを着た、垣根帝督が立っている。

「……分かってんだよ。俺が馬鹿だって事ぐらいはなあ」

酷くつまらなそうに、垣根は呟いた。

ぼろぼろの体に鞭を打ち、足を片方引き摺っている。

そう、相手は虫の息も良い所だったのだ。ぼたり、ぼたりと傷口から血が漏れ出し、その度に苦悶の表情を浮かべている。

(……なんだってんだア？ なーんなーんですかア？)

小馬鹿にしながら、一方通行は腹の内で嘲笑った。

これが、自分より一つ下の第二位かと。

これが、自分より弱い男の目なのかと。

「さつさとアイツ連れて来いよ。オマエじゃ役者不足だ」

自嘲気味に、狂気の目を向ける。

既に、興味は失せた。一度勝った相手に負ける可能性など、自分にとつては無に等しい。

それでも、普段の垣根帝督ならば、間違いなく怒りを露にしていたはずだ。

少なくとも、通常はそれを否定する。

が、

「そいつは無理だ」

垣根帝督が、微かに悲しんだように見えた。

まっすぐと向けた黒い眼差しが、それに有無を言わせようとはしない。

そして、垣根は続けた。

「……俺はほんの数時間、いいや数十回程度会話を交わしただけのあいつを、もしかして守ろうとしてるんだ。くくくつ、笑っていいぜ。一方通行」

愚かさを笑うように、垣根が自身を罵倒している。

距離が離れていても、沈黙が飛び交う無法の実験場。垣根の言葉だけが、その場に響いていた。

「本当に哀れだな、俺は。アレイスターとの交渉だ、第一候補だと抜かしておきながら、本当に哀れだ……」

もう、一方通行には理解できない領域であった。彼の存在意義は無敵になる事、それ以上でも以下でもない。妹達も、目の前の男も、一方通行にとってはただの糧。

戦闘経験として頭に蓄積される、それだけの存在。

(……何だ？ こいつ)

得体の知れない恐怖を、垣根から受ける。

垣根がどこで、何を、どうして来たかなど興味の欠片も沸かない話だろう。

関係の微塵もない男のはずだった。

軽く咳き込みながら、垣根は話し続けていく。

「くっだらねえ話ばっか振って来やがって、それで勝手にふざけやがる。この俺が明確に間違いを指摘しても、あの野郎はゆるゆると笑ってやがる。クソ憎たらしい話だ。……でも何でかねえ？ 正直、あの時間が俺が一番……楽しいと感じちまった」

満足げな表情で、垣根は告げた。

死を悟ったような、終わりを告げる顔付き。

それが、一方通行の逆鱗に触れた。奥歯を噛み締めながら、何を思ったか腕ではなく、大きく口を動かす。

「はア？ 何ほざいてんだテメエ。オマエが今まで何して来たかなんざしらねエが、どうせ碌な事じゃねエンだろオ？ 仲良しごっこがしてエなら、哀れに尻尾巻いてさっさと逃げ出しやがれっ！ それが筋つてもンだろうがよオ」

肩を上下に、一方通行は息をする。

呼吸を乱しながらも、何かを伝えた。実際、何を言っているのかは彼にだって分からない。

だが、まるで嫉妬のようだった。

自分が手に入れていないものを人が手に入れているから、それを壊そうとする暴君のような口ぶり。

そして全てを見透かしたように、垣根帝督が鼻を鳴らす。

「俺に比べて、お前は何も分かってねえ」

ため息混じりに、垣根が天を仰ぐ。

「この俺の……俺達の常識をテメエの物差しで計ってんじゃねえ！
いいかあ！ 仕方ねえから教えてやる！ 俺とあいつは仲良しご
つこの仲間でも、敵対する暗部でもねえ！ テメエという標的を追
う同じ狩人なんだよ！ 俺が先にテメエを殺る為に来たただけ。勘
違いしてんじゃねえ！」

垣根帝督には、未元物質を使う力は残っていない。
力強く大地を蹴り、肉体の強さだけで、こちらへと齒向かって来
る。

「一方通行アアアあああああああ！」

ただ、一つ。

全世界に響き渡るような、雄叫びを上げて。

「……………」

垣根が去った跡地で、零次はそっと腰を掛ける。

向こうでは、戦闘が始まったと思われる衝撃音が轟いていた。ほとんども、一方通行の虐殺状態だろうか。

学園都市の頂上決戦とも言える戦いは、熾烈を極めたものとなるはずだった。

ぐおん、と一際大きな爆音が鳴った後、戦後とは思えない程の静けさが辺りを漂った。

垣根帝督が、一方通行に敗北した音。

零次は立ち上がる事もせず、脅える事もせずに、ただ耳を塞ぐ。

最初に逃げ出したときは、明らかに状況が違った。垣根帝督という人間の生存率を百分と見たから、零次は逃げたのだ。

だが、今の垣根が戦って生きていられる確立など、この世の数値で表せれるのだろうか。

『みかがみれいじー？ 私はインデックスっていうんだよ？

れいじー、よろしくね』

記憶喪失のシスターに本当に始めて出会ったときに言われた言葉。

日本語が達者なのに、何となく名前の部分は片言で、とてもここにこと笑っていた少女だった。

『私の事知ってるの?』

これが、彼女にとっては初めて出会った最近の言葉。

インデックスが日本にいる事態、零次には知らされていなかった。本当なら真っ先に潜入者に伝えるであろう事なのに、最大主教も気を使ったのだろうか。

インデックスと出会ったのは、数年程度前。そして、零次はたった一年でインデックスの前を去った。

怖かった。

まるで、自身の存在を完全に否定されたかのようなのだ。

自分が知っていても、彼女は自分の事を知らない。何度を顔を合わせた人物だと零次は認識していても、インデックスにとっては他人。

一度忘れられただけでも、心に傷を負う。だから、神裂やステイルは心底強い魔術師だと思っっているし、尊敬している。自分とは違い、インデックスの傍を離れようとせず、悪役になっても関わっていきける二人を……。

また、同じだった。

震えて、耳を塞いで見て見ぬ振りを決め込もうとしている。

垣根が一方通行に殺されれば、それは実験中の不慮の事故として、表向きに語られる事すらない。永遠と研究者どもと自分の頭に、それが付け加えられるだけなのだ。

「……けるな」

弱々しく、でも決して小さくない声で、零次は言葉を漏らす。

だが、足が竦む。人の命が尽きるのが怖くて怖くて、それを目の当たりにするのが苦しくて苦しくて溜まらない。

（立て、まだやれる。頭痛も治まった、助けるんだ。……誰を？
罪悪感から自分を？）

思考だけが無駄に過ぎる。

インデックスを見捨て、傷つくのを免れる。

垣根帝督を見捨て、己の命だけを守る。

どちらも、同じくらい無意味だった。自己満足しか生み出さない、本当にいらぬ結末。

『テメエは俺を助けただろうが』

何食わぬ顔で言った事が、さらに零次を苛立たせる。

「……ふざけるな！」

怒号とともに、零次は立ち上がり、駆けた。勝率や勝算などは微塵も頭を掠めない。全力で、損得感情を抜きにして、ただ助ける為だけに、そこへと向かった。

「おお、遅かったなア。退屈凌ぎじゃ退屈過ぎて飽きちまった所だぜエ？」

一方通行が、呻いた。

血生臭い戦地で、彼だけが悠長に呼吸しているのだ。

足元に横たわった人間が一人。赤いスーツにも同化し切れない程の血が、コンクリートを染め上げていく。

「こいつも案外面白かったけどなア。足りねエ！ 全っ然足りねエ！」

がん、と一方通行の足が、うつ伏せになっている垣根を引っくり返した。腹部には何度も攻撃を受けた跡があつて、血の逆流の結果ではない。

「……ごふッ！」

軽く垣根が咳き込む。

見た所、生命維持がやつとの状態だ。これ以上出欠をすれば、すぐさま天国か地獄、どちらかへ旅立つ結果となる。

けれど、まだ生きてる。

「……間に合った」

一言、零次は告げた。

コンテナだらけの実験場で、一方通行が不快そうに眉を寄せる。

「あん？ 間に合った？ 頭沸いてんのかテメエ？」

「いいや、間に合ったよ。僕がここにいて、ていとくんが生きている時点で」

零次は微笑む。

垣根帝督がまだ生存していて、その為に自分が何かを出来る。逃げ出した分際がやれる事など、自ずと限られていた。

未元物質の脱出は不可能。

つまりは、一方通行を撒くか戦闘不能にしない限りは、この状況は打開出来る事はない。

「それに、笑いつてのは相方がいないと成り立たなくてね。僕はピンでやっていくのは苦手だから……」

けたけたと、無垢に笑う。

こんなときに冗談を言える自分は、やはり普通ではないのかも知れない。

風が、呻く。

暴風と呼ぶには優しい風が、ふんわりと零次を包み込んだ。

「何言つてやがんだ？」

と、一方通行が足を上げる。邪悪に満ちた目付きが垣根へと向けられた。

「俺がこれを降ろしちまえば、それも終わりだろうがよオ!!」

鋭く振り落とされた踵。

傷口を狙った一方通行の攻撃は、瞬く間に垣根の寿命を減らし、生存確率を減らしてしまう。

すんつ。

一步踏み出しただけで、零次は一方通行の懐に潜り込む。そして冷気を放つ左拳を、顔面へと叩き込んだのだ。

「じつ、がつ……」

そこらに転がる石を投げたように、一方通行は地面を転がった。悲痛に呻いて、コンクリートに横たわる。

のた打ち回ってもおかしくはないのに、それでも起き上がって、こちらを凝視したのだ。

「……テメエ、何しやがった」

す、と一方通行が立ち上がる。

疑問は最もだった。

例え一瞬反射が破られたとしても、その後に血流を操れないはずはない。

こちらが触れようと、向こうから触れようと、皮膚に感触が走った瞬間に一方通行が指示を出せば、死へと直結する。

でも、零次は言った。

「……………少しだけ、ほんの一撃を食らわせる為に、薄皮一枚程度の氷を拳に張った。それによって反射も破れるし、血流操作も効かない。でも、お互い様でしょ？ 僕も無事では済んでないから」

ばきつ、と嫌な音を立てて、左腕が在らぬ方向へと曲がる。骨が折れたとは考えられない鈍い音に、零次は目を瞑った。

(くっ、うつ…………)

通常演算を超えた頭痛よりも、重い痛みを伴う。複雑骨折なんて言葉で済ませれるのだろうか？

左腕の半分は、通常は曲がるべき関節の反対側へと折り曲がる。直接殴り飛ばした指など、全てがばらばらな方向に折れた。

痛みには耐えながら、零次は一方通行を見据える。

「フーことはテメエはその右腕以外に使用できねえ訳だろ？ それとも玉砕覚悟で両足も使ってみるか？ やめとけやめとけ、そんなもんじゃ俺は死にはしねえし気絶もしねえ」

「 だろうね 」

自慢げに語る一方通行に、零次は右腕を上げる。

痛みには耐えながら、必死に笑った。

明日も近付いてきた真夜中の、雲一つない空を見上げた。

「 ねえ？ 僕が今まで生きてきたのは、何でだと思っ？」

「 じつ。 」

最初と同じように、冷気を舞わせる。さっきの比ではないほど、冷たい、人間のぬくもりなんてものを欠片も感じ取れないような冷気。

それはつまり、限度を超えた演算の回路を回している事と同じである。

家庭用のコンセントとも同様。限度を超えればブレーカーが落ちる。この状態でのブレーカーは、脳の血管という事になるだろう。右手に、冷たい触感が漂う。

透明な刀の生成。

太刀の部類の長刀を、零次は笑いながら傾けた。

8話 覚悟（後書き）

次話でVS一方通行ラストです。

一方さんだけでこんなに掛かるなんて……まだ上条さんとも少量しか話せていないのに……。

もし、仮に新約まで行ったとします。そしたら1000分やそこらではもしかしたら収まりが効かないかも知れないですね（笑）

9話 玉座

「……それか？ 反射の効きがわりインだがなア」

「まあ、これは魔術みたいなものだから」

「魔術だ？」

暗い夜が更なる漆黒へと落ち、それでも街灯がそれらを照らす。

全能氷域によって生成した太刀もその恩恵を受け、透明な刃が輝いた。

「んなオカルト信じてんのか？」

「信じてるといっつか、崇拜してるって感じ」

「崇拜？ 学園都市で言う言葉じゃねエだろ」

ほき、と一方通行が首を鳴らす。

神だの天使だのと言ったものがこれほど似合わない人間も珍しいだろう。世界を相手にできる超能力者ならなおさら。

「テメエとは会話になりそうにねエわ」

うんざりとしたようすで、一方通行が呟いた。

「……じゃあ、そろそろやめようか」

すう、と山吹色の瞳を向けた。

痛みが消えない左手を構う事なく、太刀で空を切る。

「氷結せよ。砕けた世界の果てに据える。イーサー！」

詠唱と同時に、周囲のコンテナから氷の矢が降る。ほぼ無防備な

一方通行を八方から襲った。

ルーン魔術。

ルーン文字には、それぞれ単体に意味があり、二十四種の文字列と効力を使い分ける事で力を発揮する。仕込む位置、物品、文字の正確さがそれに連なる。

もちろん、零次にとってこれが専攻ではないし、だからこそ氷以外は扱えない。

(……っ！)

一度、後方へ飛んだ。

壊れない氷の矢は直接零次を狙うでもなく、縦横無尽に駆け巡ったのだ。

そのうちの一本が、一方通行の足元へと刺さる。

「……確かに、能力じゃねエ見てエだな。どうにも演算がうまくいかねエ」

無傷の一方通行が、手に持った矢を折った。何事もなかったかのように生還した一方通行に、零次は内心毒づきながら、

「ならっ！」

力強く、零次は地を蹴った。

大した間のない距離を詰め、太刀を横に一閃する。

軸足の回転も加えた全力の一振りだが、一方通行の首を目掛けていた。

ぱき。

乾いた音が鳴る。

勢い付いて振った刃は、一方通行の皮膚に当たる前に砕けたのだ。「くっ……」

つまりは、一方通行の演算が、自分をさらに上回ったのだ。

元々レベル6への進化^{ソフト}実験は、二万もの戦闘パターンを経験させて、最後にレベル6へと到達し得るというものだった。

一方通行が強くなるのは、何も妹達との戦いだけではない。学園都市最強の能力者は、こんな野試合でも経験を蓄積させている。

距離を取ろうとするが、目の前には手が迫った。細く、白い、触っただけで折れてしまいそうな純白の右拳。

だが、その感触は頬を掠めない。

「あ？」

不思議そうに、一方通行が目の前透明な壁を見据えていた。

氷壁。

あるいは、守護結界。

日本の代表的とも言える神道の楔ぎを組み込んだ氷の壁は、一方通行の反射を持ってしても砕くのに数秒の時間を有した。

「……ふう」

コンテナ上へと飛び上がった零次は、ようやくため息を付く間を与えられた。下では心底つまらなそうな表情を浮かべた少年が、氷結界を殴り壊している。

「いやあ、触れられても触れても終わりって、何だか卑怯じゃありません？」

「知るか」

無碍にも、一方通行が言う。

炯々とした真紅の眼が、こちらへと訴え掛けているのだ。

「えー？ やっぱり卑怯ですよ。武器作ってもあっさり壊されちゃうし……」

顎をしゃくって、零次は漏らした。

先程までの緊迫した表情は消え失せ、いつものやんわりとした笑みが戻っている。

何でもなく、勝利を確信した笑み。

「さっきの氷壁だってすぐに壊しちゃうし……あれ何秒で壊れたと思います？」

「さアな」

「めちやくちやです、ざっと三秒ですよ？ 妖気でも何でもないから楔ぎじゃこれが限界なんでしょうねー」

微笑みながら、零次は続ける。

「例え困んだとしても一枚三秒じゃ割りに合わない。でも十枚なら三十秒。百枚なら三百秒時間が稼げる訳ですね」

「テメエ……何が」

言つて、一方通行が表情を曇らせる。

恐らく悟つたのだろつが、既に仕込みは済んでいた。太刀が壊れ、自由になつていた右手を、視界の先で一方通行と重ねる。

「千枚なら、単純計算で五十分閉じ込められる」

低く、零次は呟いた。

悠々とした笑いが余裕へと変わる。

「ッ！」

刹那に、一方通行が動いた。

雷のごとき反射速度で飛び上がり、拳を構えたのだ。

「テメエエエエエエエ！」

咆哮。

猛つた一方通行が、先とは段違いの速度で拳を振り下ろした。でも、それも届かない。

「また、いつかお会いしましょうね？」

一方通行の周囲が、透明な壁に四角く包まれた。

十、二十、五十、百、五百と、それは分厚さを増していく。数十秒後には千枚もの氷壁が連なり、内部など目では確認できない。

超能力者との戦闘において、不思議な形で勝利を収めたのだ。

9話 玉座（後書き）

うん、多少手抜きになったけど、一日遅れたので更新します。
特に見直しも何もしていないので、間違った表現などあったらどうぞ。

ちなみに、創作時間30分だったりしますw

10話 終わりの先

暗い。

絶望の色とも似た黒一色の世界。人はそれを目蓋が閉じているだけだと、どうして考えられるのだろうか。

瞳は目蓋の裏側を見ているのではなく、目を瞑っているとき、闇へと落ちている。

それが、垣根帝督にとつての自分だけの現実だった。

「……………何だ？」

その瞳で見ているものは、いつもと何も変わらない。暗黒が広がる道に、街灯がそれを払拭すべくささやかな光を送っている。

自分で歩いている訳でもないのに、ゆっくりと視界が変わっていた。亀の方が速いのではないかと錯覚しながらも、視線を傾ける。

「お前……………」

もはや、垣根は驚く事すらしなかった。

何となくいつもより高い位置から見渡せていた。足も宙に浮いたまま、進んでいるのもおかしいと思えていたはずだ。

「……………動かない、で。支えて……………らない、から」
返ってきた言葉は、とても弱い。

脆く、小さい声の少年が、自分を運んでいた。

異常な方向へと折れ曲がった左腕で無理やり軸を作り、無事な右手と背でもたれさせていたのだ。

「……………止まれ、もう歩ける」

「……………」

「おい」

と、声を掛けたとき、頭に水滴が落ちた。

雨。

ひんやりと冷たく降り注ぐ水は、誰の涙なのだろう、と垣根は不思議と考えた。

ああ、原理は分かっている。大気中の水蒸気が冷えて雲ができ、その雲の中で成長した水滴が落下するだけ。

だが、垣根は不覚にも思ってしまった。もし神とやらが存在するのなら、超能力だろうと何だろうと、元祖は天。学園都市の能力開発も、科学も、全ての根源はそれかも知れない、と。

(じゃあ、それらの現象に対する事実を元に……駄目だ、頭が回らねえ)

風穴とは行かないまでも、実際損傷は酷い。

恐らく止血されただろう傷口の痛みは継続され、今にも垣根の意識をそぎ落としてしまいそうだった。

そして、いつの間にか雨脚は強くなっている。

ぽつぽつ、と小降りだった水滴が、コンクリートに穴を開けようとしているように、ザーザーと音を鳴らす。

「……僕は、やらなきゃいけないんだ」

やはり、少年の声は弱い。

それでも、さっきとは違い、瞳の色は澄んでいた。どこでもない道のずっと向こうを、その目は見据える。

「きつと、遂げる。世界の理だって否定してみせる。誰よりも何よりも上に立って、すべての頂点に立つんだ。……だから、さ……」

ぴたりと、零次の足が止まる。

何事かと聞く事もままならず、ぱたん、と地面に倒れこんだ。

まるで、先程の言葉が遺言だとも表すように。

「……………」

雨に濡れた少年は、ピクリとも動かない。

「……分かってんのか？ 自己犠牲つてのは、掛けられた人間の方が辛い。テメエのやってる事は、それと同じなんじゃねえのか？」

「……………」

問い掛けても、少年が口を動かす事はない。

振る雨の冷たさか、次第に零次の体温が低下していく。氷のような冷たさが、触れていた手の平から伝わったのだ。

「野望があんだろ？ この俺が、すげえ暇なときになら力貸してやるよ。ありがてえだろ？ 何せ学園都市第二位の力添えが受けれるんだからなあ」

「……………」

沈黙。

雨音が、少年の微かな声を掻き消しているのだろうか。

はたまた、もう本当に……………」

「何か言いやがれ……………零次」

ぽつりと、垣根は言い漏らした。

それすらも、鬱陶しい豪雨が薄めてしまう。聞こえているかどうかとも分からない言葉を気にしながら、止まない雨を降らす天を見た。

「……………なあ」

今一度、垣根は神へと問う。

「何でこいつなんだ？ ど悪党な俺が死ぬんなら道理だ。そりゃあ仕方ねえ。でも、こいつは違うだろうが……………」

垣根は言い切るが、実際分からない。

瀕死の少年が今まで何をしていたのかも、自分には見えてこないのだ。一方通行の戦闘の一部だけでも、レベル3などで納まる器とは思えなかった。

力云々よりも、もっと奥の……………」

「はっ、柄にもねえ」

苦笑して、垣根はゆっくりと立ち上がった。

傷は痛むが、走れないほどではない。もとより、けが人などという枠すら超えたそれを見たなら、この程度の外傷でへばってなどいられないだろう。

「俺を勝手に助けて、勝手に死ぬると思うな。文句の一つは言わせてもらっぜ？」

去り際に残し、垣根は走った。

ずぶ濡れの真紅色のスーツがはためき、重さからかバサバサと鳴る。

たった一人の救世主へと、脇目も振らずに駆けたのだ。

10話 終わりの先（後書き）

10話目です！

何だか大台に乗った感じですね。

というか、いつの間にやらお気に入り登録が40件を超えておりました。

ちょっとネタバレですが、新キャラ投入予定です。

IFなので、大丈夫ですよね？

11話 思い返し

ほぼ、同時刻。

夜の色が濃くなり、戦闘が済んだ実験場は、これでもかというくらいに音が消えていた。そして、暗闇を切断したかのような氷壁が、四方を取り囲んでいる。

冷たい壁に阻まれた一方通行は、無理にそれを壊そうとはしなかった。むしろ、永遠に閉じ込めてもらいたかったのだ。

レベル6への進化^{ソフト}。

それは、超能力を超えた絶対能力へと進むための実験。科学者の夢、とでも言えば格好は付く。

自分だけが到達可能な、未知の領域。人類にとっても未知なそこへ到達するには、二万人もの命が生け贄に捧げられる。

「……ああ、今さらだ。気付いたって変わらねエ、俺自身が終わらせる事もできねエ……」

腰を下ろして、一方通行は呟いた。

目の前の障壁を破壊して、出る事は容易だ。五十分などに見積もっていたが、本気でやるなら五分と掛からないだろう。

だが、出てどうする？

幼少時に、一方通行の能力は目覚めた。操作などできなかった最初は、人と接触する度に怪我人が増えていった。温もりに触れる事なんて、どうして叶えられようか。

そのうちに、彼は心を閉ざした。

誰かに、心の扉を開く事など皆無。次第に一方通行は、考えるようになっていた。

最強。

どんな馬鹿げた人間でも、適わない相手に向かってくる事はないだろう。人は賢い。自身の危険にもっとも敏感で、己の保身のためなら犠牲など厭わない。

だから、最強になればいい。

殺めたくないのなら、戦わなければいい。戦わないためには、相手がいないければいい。相手がいないというのは、誰もが適わない存在になればいいと、過去に一方通行は結論付けてしまった。

その結果が、さらに不幸な人間を増やすなどと、過去の自分は思いもしていないだろうが……。

「くくくつ」

狂ったように、一方通行は笑みを噛み殺す。

五本の指を頭に添えた。そして、一方通行は自分の頭を握り潰そうとしているかのように、ぐっと力を入れる。

迷った事などない。

到達すれば全てが片付くから。

躊躇うつもりもない。

尊い犠牲と、後に割り切ろう。

たった二万人だ。世界の総人口と比較して、その程度で済むなら安いものだろう。

(……あと一万、ぶつ殺せばいい……)

指先の力を、一層強めた。

血走った眼で、一方通行は白い壁を見据える。何重にも重なった透明な壁が、外の風景を完全に遮断していた。

ひらりと、揺れた。

純白の内側から見た景色に混じるほど白い、外で何かが蠢いたのだ。

「ふうん？　これが学園都市最強の一方通行か……」

声の聞こえた箇所へと、一方通行は瞳をギラつかせる。声音はや高い、少女の声。

「……どこの差し金だ？」

「アレイスター、っても、今回限りみたいなものだし、直属って訳でもない。ちよつと忘れ物を取りにきただけだからなあ」

男勝りな口調で、少女がひらひらとそれを振った。

黒い、箱のようなもの。少年が戦闘前に放置して、そのまま置いていったものだろう。能力データが入っているとみて、ほぼ間違いない。

「そいつをどうするつもりだ？」

「言つたはずだが？ 私は直属じゃない。好きにやるだけさ」

千枚の壁を通して、こちらの殺気が通っていないとは思えない。それでも、少女の炯々とした態度は微塵も崩れなかった。

「それに、これはお前のじゃないらしい。……学園都市統括理事長が、学園都市最強のレベル5の能力を把握してないのはありえないだろうから、恐らくは……」

言つて、すたすと、少女の乾いた足音が聞こえた。

それに従い、視界の先もぼやけていった。段々と、少女が離れている事を意味している。

「待ちやがれ！」

気付けば、一方通行は氷壁に顔をべつたりと付けていた。そこから目を凝らせば、どうにか姿が確認できる。

年は、対して変わらない少女。

白い氷壁にも埋もれてしまいそうな亜麻色の髪を、肩まで適当な長さで伸ばしている。黒い喪服を着て、手作りに見えた草鞋が、その乾いた音を出していたのだ。

「あ、そうそう」

かぶりを振つて、少女がこちらを向いた。

瞳は綺麗に茶色が掛かった、黒。それも突き刺さるような冷たい視線が、こちらへと流れる。

「絶対能力への、進化実験の続行意思是？」

「あア？」

少女がついでのように漏らした言葉に、一方通行は食って掛かった。

「……続けるに決まってるんだろうが」

一瞬口籠って、一方通行は言い切った。

ああ、当たり前だ。

そうでなければ、一万人も殺した意味が、全て無へと変換されてしまう。自分が怖いのは、人を殺す事よりその殺した人物の死の意味が、全て消えてしまう事だ。

そんな言葉に、少女がゆったりとほころばせて、

「そうか、ならそのように伝えておくとしよう……」

と、少女が告げる。

草鞋の乾いた音を鳴らして、その場から去っていった。

「では、私はこれで……」

すっ。

壁の向こうにいた少女が、一瞬で消えた。高速で移動する能力の類ではなく、予測するのなら空間移動テレポーターがアレイスターから送られていた、か。

案内人。

窓のないビルへと、交渉者などを招き入れる人間。噂程度でしか小耳に挟んだ事はないが、それが空間移動だとすれば、合点がいく。

「……いいねエ」

ぼそりと、一方通行は囁いた。

時代が動き始めている。アレイスターが学園都市を設立してから、ずっと変わらなかった現状が、変わり始めていた。

なら、上に座るのも面白いだろう。

ぐっ、と一方通行は拳を握り締めた。頭を締め付けたときとは比べものにならないほど、籠る。

「邪魔するってんなら、容赦しねエからなア！」

がなりを立て、一方通行は拳を突き出す。氷壁へと当たったそれは、貫通せずにその場に居座った。
びきつ。

一気に、全方位へと亀裂が回る。ひびの入ったガラスのように、脆くなった氷壁に少し触っただけで、夜の世界が広がる。

白から黒へ。

正義から悪へ。

今の一瞬は、それを表していたのだろうか？

壊れた破片を眺めて、一方通行は不適に笑みしたのだ。

11話 思い返し(後書き)

最近短いですね。

でも、忙しくてこれ以上は伸ばせそうにないです。

12話 異例の昇格（前書き）

一方通行との即再戦フラグっぽいのを立てていましたが、別にそんな事はありませんので……

12話 異例の昇格

朝日が差し込んだ部屋。

それもただの部屋ではなく、薬品の匂いや、その場の独特な雰囲気とまっさらな部屋で、大体の予測はついた。

ここは、病院。

「ッ！」

これまた真っ白いベッドで、零次は目を覚ました。

目覚めた要因は、痛み。

頭の、それも内部の神経を直接痛めたような激痛が、体中を蝕んだのだ。

「いたたたたっ！」

身を振じらせて、どうにか苦痛を逸らそうとするが、全ては脳内へと突き刺さる。記憶も、痛みも、連想した思いも全て。

「おや？ 起きたのかい？」

傍には、良く見ると人がいた。

年は、かなり取っているだろう。年とは一致しない小さめの肉体ではあったが、白衣を着ている所を見ると、どうやら医者のようにある。

そして、顔はどこことなくカエルに似た、そんな医師。

「……僕は」

と、零次は言う。

激痛はある程度止んだが、聞きたい事は山ほどある。どうして無事なのか、どうやって来たのか。

垣根帝督は、どこへ行ったのか。

「かなり寝ていたね。手術からもう数日は経過しているからね」

「数日？」

「ああ、すまない。長い手術だったからね。こちらとしても正確には把握できてないんだ」

「え、と。それはいいんですけど……」
僅かに、零次は口籠った。

同時に疑問に思う。魔術による副作用は、あの頭痛とは関係がない気がしたのだ。あれは、強能力者が超能力者の真似事をすればどうなるか、と言うものの良い例えだろう。

元に、実害がない。

「……感謝するんだね」

不意に、医師が告げた。

「あの子……確か垣根君だったかな？ 僕の噂の断片だけで探し当てたんだから、相当困ってるんだと思ったら、道端で君が倒れていてね。彼も相当痛手だったのに、病院まで君を運んだんだから」

「え？ じゃあ居たんですか？ 今どこに！」

ぐつと、零次はベッドから乗り出した。

「さあね、一日で怪我を治してしまったからね。最近の子供はみんなファンタジーな構造になっているのかい？」

「……いいえ、僕は至ってノーマルです」

「その割には、腕は早く治ったもんだねえ」

ゆつたりと、医師が笑う。

と、聞いてから左腕を視野に入れた。複雑過ぎた骨折をした腕と指は、ほぼ正常な位置に戻っている。起きてからも動かしているのに、今の今まで怪我をしていたという事実を忘れてしまっていたほど、見事な修復だった。

「大体、君の危なかったのはそんな所じゃないから」

言いながら、医師はこつこつと、人差し指で自分の頭を突いた。

「頭？」

「そう。脳に損傷が残らなかったのが不思議なくらいだったよ。神経回路が根こそぎフル回転させて、無理やり演算に加えたね？」

ぎく、と零次は肩を震わせる。

もはや弁解の余地などなく、乾いた愛想笑いで誤魔化した。すると、医師はため息をついて、

「……むしろ、そんなのは常人が成せる業ではないがね。演算能力を無理やり引き上げるなんてできるなら、この世には無能力者なんて存在し得ない。……いいかい？　今回は偶々だと考えるべきだよ。次に扱った場合、命の保障なんてものは付けられない事を覚悟しておきなさい」

「は、はあ……」

頷いて、医師を見据えた。

話を終えてから、医師がごそごそと何かを取り出したのだ。

灰色の　ただの新聞。

「そうそう、さすがに当人に見せない訳にもいかないと思って取って置いたよ。……後、コーヒーいるかい？」

す、と新聞とカップが纏めてくる。

どうも、と礼をして、治ったばかりの左手でカップを受け取り、口へと注ぎながら医師の示した新聞へと目を通した。

「　　ぶーっ！」

すぐさま、零次は勢いよくコーヒーを噴出したのだ。

霧状になって空気と漂ったコーヒーの残骸。そしてカップを一旦置いて、もう一度じっくり新聞に目を通す。

（ありえない、ありえないから。見間違いだね、うん。そういえばまだ頭痛いし、幻覚幻覚……）

慰めながら、そつと問題の文章を見た。

『レベル5七人の均衡破壊？　強能力者、二段昇格で学園都市第四位へ！』

見出しに大きく、そう書かれていたのだ。

さらには、学園都市に入るために作った自分のパスの写真も、ついで載せられている。

「何でこんな事に……」

「全く持って疑問だね。君の能力値はレベル3だったかい？　超能

力者の序列は、何らかの意味を持つと言われているから、強さとはまた別なのかね？」

「いや、ほとんど強さも表裏一体ですよ。……だからこそおかしい、別にばらすような人に見せた覚えは……あ」

ゆっくりと、思い返した。

重たい、カメラのような荷物。

あれはスイッチの切り方など載っていなかったたので、ずっと入れっぱなしだったのだ。しかも、垣根を背負ったまま持ち運ぶ事などできずに、そこらへと投棄してきた。

ああ、と呟いて、零次はうつむく。

（腹癒せか、腹癒せだ。あれを持ち帰れなかった僕への腹癒せだろう？ アレイスターめ……）

「これからは大変そうだね。何せ超能力者は学園都市の顔でありながら、妬みの対象。今までは絶対的な強さがあってこそ、大規模な襲撃などはなくても、新入りの君相手ならやってのけそうだからねえ……」

不吉にも、医師がぼやいた。

患者にここまで不安を纏わせる医者など、存在していいのだろうか。

「やめてください。今僕は人生設計を考え直しているんです」

「そうかい？ 顔も割れてしまった訳だから、もしかしたらもう……」

……

こつん、こつん。

乾いた足音が、医師の声を遮った。

静かな病院の廊下を進む音。

「ここにきてしまっているかもね」

医師が告げ、数瞬後。

がらがらと音を立てて、病室のドアが白い手によって開かれた。

13話 運命

白昼。

実際には十時程度の時間帯だろうが、空は透き通っていた。水色の青い天には雲一つ存在せず、太陽の光だけがさんと降り注いでいる。

その、道の中央。

学生服を着た少女は、のほほんと佇んでいた。いつもの服装とは勝手が違つとぼやいていたが、昼間から喪服で歩く訳にも行くまい。ゆえに、学生服。

どこの中学か、はたまた高校かも分からないものを適当に購入したのだ。すらつとした体型には、やや標準の服では大きい。少し短めの青いスカートのポケットから左手を抜き、面倒そうに、少女は亜麻色の髪を掻き揚げる。

「……何にしても」

静かに、少女は語り掛けた。視線の先には、真っ白な建物が悠々と聳えている。

病院。

言わずと知れた、冥土返しが住まう城。

一般人にはただの名医にしか見えていないだろうが、その腕の程は理屈などで表せるものではない。むしろ、学園都市にいる事自体がイレギュラーな医師。かつてアレイスター「クロウリーすらも天国から連れ戻した男だ。

（ま、アイツの力なら既に完治済みだろう……）

ふふん、と少女は愉快にも鼻を鳴らす。

そう、本当の目的はそこにあるのだ。未だにこの病院にて、治療を受けているであろう少年。彼の力を試すための、一方通行との戦闘。そうでなければ、勝てもしない第一位との戦いに向かわせた意味なんてない。よもや、垣根帝督まで巻き込むとは、少女にとって

予想外ではあったが……。

通行の少ない道端で、少女はこう告げた。

「……朗報だろう？ 貴様は学園都市で八人目の超能力者と認定されたのだからな」

光栄に思え、と言いたげに窓ガラスを見上げた。様子までは汲み取れないが、水色の髪の子少年が廊下をしきりに見据えている。

「……イギリス聖教よ」

薄らに笑みし、少女はそう吐き捨てた。その名には、想像以上に憎悪を感じる。自身が発した言葉であるのに、苛立ちと憤怒を抑えきれず、拳を握った。

そうして、ふう、と力を抜き、少女は天へと言ったのだ。

「貴様らの隠し持つもう一つの禁書目録は、私が貰い受けよう……」

「あれ？ とうまは？」

細い手で病室のドアを開けて、少女がいぶかしく言葉を発した。

壁や床に溶けてしまいそうな白い修道服。その修道服すら、神の使いとは思えないほど切れ目が続出して、巨大な安全ピンで止めていた。そして、フードの中から零れた銀髪に、不安そうな顔がこちらへと刺さる。

「？ あの少年なら、もう一つ上の……」

「あーっ！」

と、インデックスが指を伸ばした。

あわあわとした不安げな表情などすぐさま吹き飛び、零次の視線

と重なる。きよとん、とした零次は、疑問符を付けた。

「……僕？」

「うんうん！　とうまはとうまは！？」

少女が、ベッドの付近にまで近寄った。

先の医者 of 言葉など米の粒ほども聞いていなかったインデックスが訊く。一度と言つても直接家を訪れた自分が、上条当麻の居所を知っていてもおかしくはないという、彼女なりの見解だろう。

だが、その少年が病院にいと、インデックスが確定付けていた。「上条君、怪我でもしたの？」

と、零次は訊く。

「……わかんない」

酷く悲しそうにうつむいて、インデックスが呟いた。

わからない、という回答はどうだろう。

そもそも、一般的な人が病院を訪れる理由としては、見舞い以外には考えられない。そして、見舞いだと仮定すると、怪我か病気、どちらかしか選択肢はないはずである。

(訳ありか……)

はあ、と零次は軽くため息を付いた。

十万三千冊の魔道書を頭に記憶した少女が、疑問に匙を投げた。それは、到底自分には予測のできない事だという示しだ。

世界の崇高な神々達。

その中でも運命は、運命の女神によって定められる。

名をクロト、ラケシス、アトロポスという三人の女神。古来から人間の運命に関わってきたギリシャの神々だ。

クロトは紡ぐ者、ラケシスは分ける者、アトロポスは曲げられぬ者。

つまりは、『運命を紡ぎ、それを分け与え、その変更を許さない』のである。

それらの概念においては、どんな偉人も……インデックスも例外

ではないのだろう。

だからか。

「……確か、一つ上、とか言い掛けましたよね？」

ぼん、とインデックスの頭へと、零次は手を乗せた。

泣きじゃくってしまいそうだった少女の顔が、一瞬ビクついて、その後には和らいでいく。

口を挟まないと決めたのか、零次の問い掛けに医者があなずいた。

「じゃあ、行こうか？」

「ふえ？」

予想外の答えを聞いたという風に、インデックスが惚けた声を漏らす。

「会いに来て、その目標の人物がいるのに、行かない訳に行かないでしょ？ 僕も一緒に行くからさ」

こつこつと開きっぱなしのドアへと歩みながら、零次はインデックスへと問うたのだ。

進む意思を。

禁書目録の絡みだとすれば、ただで済んでいない可能性も、少女の視野には入っている事だろう。会っても狂っていたり、永遠に植人物人間になっているという事も考えられた。

押し黙って、インデックスの喉からは唸りすら聞こえなくなる。

(……ちよつと羨ましいのかな)

後方にいる少女に悟られぬよう、零次は苦笑した。

何も上条が不幸に巻き込まれた事に関してでなく、出会って数日だろう少年がそこまでの信頼を得ている事への妬み。

でも、暗い感情などまるでない。

「……………行く」

小さな声で、インデックスがささやいた。

本当に小さい。医者には聞こえていないのではないかと思えるほど、実際、誰にも聞こえないようにした少女なりの決意の現れ。

同時に、インデックスがたとたと、こちらに歩み寄る。

(それ、僕には聞こえたからね……)

少女の決心を心に刻んで、零次は思う。

昔の自分は、今みたいな少女に焦がれていた。思い返すのも腹立たしい、何もかも周りのせいにして逃げ続けていた過去の自分。

「あ、えっと……」

踏み出す直前、インデックスが口籠った。

ほんの少し頭を下げて、指と指をぶつけ合っている。何を意味しているのかを感じ取って、零次は言う。

「僕は、三鏡零次だよ？」

と、顧みてそっと笑い掛けたのだ。

目を疑ったように、インデックスが目蓋の開閉を繰り返して、

「みかがみれいじー？ 私はインデックスっていうんだよ？ れいじー、よろしくね」

くっ、と吹き出しそうな笑いを、零次は堪えた。記憶が正しければ、彼女が口にした言葉は一字一句、過去の言葉と変わらない。何ともおかしい現状を、頬を膨らませて必死に留めた。

「……何で笑ってるの？」

「え？ や、そんな、ね。笑うだなんて失礼な事、す、する訳ないじゃないですか」

途切れ途切れに、零次は否定する。

だが、押し通せなかったようで、同じくぶくっ、とインデックスが頬を膨らませて、

「……………馬鹿にして」

ぶいつ、とそっぽを向きながら、少女が答えたのだ。

「さてと」

零次は一息入れる。

聳え立っているのは、平凡な病室のドア。

そして、壁には『上条当麻』と記入を施されていた。

二度ノックして、反応を待つ。

「はい？」

向こうからの返事の途端、制服の裾をぎゅっと、インデックスが掴んだ。

小刻みな振るえは布を通しても感じられ、それほどに少女が脅えている。

それを振り解こうと、零次は大きく息を吸って、

「失礼しまーす」

と、嘯いた。

隙間から見えたのは、自分のいた病室と何ら変わらない部屋に、上半身だけ起こした少年が一人いる風景。

夏の暖かな風にカーテンが揺らぎ、少年の黒髪も僅かに靡いた。

「……ほら」

そっと、インデックスの背中を、零次は押した。

バランスを崩して倒れそうになりながらも、少女が立ち止まる。

そして、

「あの……」

もじもじと、インデックスが言う。

落ち着かないようで、ぎゅっと修道服を掴んでいた。

今にも言葉を発しそうなインデックスを相手に、その少年は不思議そうに小首を捻り、

「あなた、病室を間違えていませんか？」

びくりと、少女が肩を震わせる。

(……これって)

記憶喪失。

あるいは、記憶破壊の類だろうか。通常は頭部を強く打ち付ける事によって引き起こる記憶喪失と違って、記憶破壊の場合は厄介だろう。

まず、治療法など存在しない。

ここのカエル顔の医師がどれほどの医術を持ち合わせていようと、なくなったものを復元させる事など絶対に不可能だ。

携帯電話の使い方を覚えていても、履歴にある人名で顔が想像できない。

歩き方は知っていても、家が分からない。

喪失にも破壊にも、結局は訪れる事だが、戻る可能性がある喪失と違って、破壊だった場合は……。

「あの、俺達って知り合いなの？」

続けざまに、少年が問う。

その問い掛けが、もっとも堪えただろう。背後からようす見ている零次は、インデックスの手が強く握り締められていくのを、一部始終垣間見ている。

うん、とインデックスがうなずき、紡ぐ。

「とうま、覚えてない？ 私達、学生寮のベランダで出会ったんだよ。」

「俺、学生寮なんかに住んできたの？」

「……とうま、覚えてない？　とうまの右手で私の『歩く教会』が壊れちゃったんだよ？」

「あるくきょうかいつて、なに？　『歩く協会』……散歩クラブ？」

「……とうま、覚えてない？　とうまは私のために、魔術師と戦ってくれたんだよ？」

「とうまつて、誰の名前？」

インデックスの必死な訴えも、少年がふわりと受け流す。まるで、何の意思もない、ただの物のようだった。

そんな反応を見ても、インデックスが最後の力を振り絞って、切り出した。

「インデックスは、とうまの事が　」

「と……そこまでね」

零次は、インデックスの口を手で覆った。

これ以上言わせたら、辛過ぎる。

恐らくは、上条当麻という人格など、この世から消え去ってしまった。記憶を失ったのなら、彼に少女の辛さなど分かるまい。

今まで傷ついてきた少女を、さらに傷つける事など、零次にできるはずもない。

インデックスが、小さく喘いだ。

直後、

「……てな」

泣き出し掛けたインデックスも、その言葉に少年へと瞳を寄せる。ゆっくりと流れた静寂の中で、その少年が笑みを噛み殺せず、予想外にもこう言った。

「なーんてな！ 引つ掛かったか！」

満点の笑みを浮かべた少年が、飄々と声を上げたのだ。
理解不能な言動に、インデックスも、零次も同様に固まる。

「え？ えつと……え？」

「何感極まってるんだよ。大体あんな光の羽なんか、ダメージが脳に通る前に幻想殺しで打ち消しちまえばどうにでもなんだろう？」

自慢げに右手を掲げた少年。

零次も、インデックスの口から手を離す。

耳元で、『殺っていいよ』と小さく呟いて、野獣の手綱を引き離れたのだ。

「……とうまあ」

下を向いたまま、インデックスが告げた。

碧眼が鋭く尖って、少年を見やる。

「……って、あれ？ もしかして本気で起こって……」
不安そうにささやいた上条をよそに、インデックスはゆらゆらと近付いていく。

その先。

零次は瞳をぴしゃりと閉じ、決して開けなかった。

上条当麻の絶叫が病院内に木霊しようとも、悲劇の現場から目を逸らし続けたのだ。

13話 運命（後書き）

以外にお気付きかと思いますが、主人公の口調は一貫してませんよね？

です、ますからだよ、からね、や荒げたりなんだりと、目まぐるしく変化しているかと思えます。その辺は後々の伏線としてありますので、疑問に思っていた方がいたらと思っで一応告げときます。

それは置いといて、ついでに。

個人的な事ではありますが、普通は5と5を一緒には使いません。でも、レベル5などのときは、何だか漢字では不自然に感じたので、勝手ながら複合しています。

14話 書きと綻び

「もう知らないっ！」

怒号を立て、少女が病室を飛び出して行った。

艶やかな銀髪を、頭ごとぶんぶんと揺らす。怒りが相当なものであつた事を、それが証明していた。

(……しかも)

それを見送つた零次は、正反対の方向へと目を向けた。

心身ともに抜け殻状態となつている少年。手や頭などの怪我部分をインデックスの鋭利な歯によつて噛みつかれ、歯型を残している。ミイラのように撒かれた包帯から、今にも鮮血が滲み出そうであつた。

「おい、生きてますか？」

「……あ、ああ。何とか……」

ベッドに顔を埋めながらひらひらと手を振つた少年に、零次は微笑み返す。

インデックスが手加減していると思つていたが、上条の様子をみるとそうではないらしい。怪我人だとかそついった事は、少女の頭から抜け落ちてしまつているのだろうか。

ごほんっ、と軽く咳払いをして、零次は口元を吊り上げた。

「それは当たり前としてさ。上条君は僕にも嘘を突き通せると思つてる訳？ 結構心外なんだけれども」

瞬間、上条の動きは止まつた。

まるで宿題をやつて来なかつた学生のように、あわあわと、でも気付かれぬように冷や汗を浮かべる。

「はっ？ 何言つて」

「じゃあ、僕の名前分かるかなー？」

悪戯に問い掛けると、上条の口が固まる。

えーと、と天井を見上げて考え込んでいるのだから、分かり易い事この上ない。

結局は、上条の行った行為は事実の隠蔽でしかない。インデックスを悲しませないための、いつ崩れるかも分からない嘘なのだ。

「ほら、やっぱり」

と、零次は上条へと背を向けた。

くるりと反転して、インデックスと同様に病室を後にしようと、右足をゆっくり床に乗せる。

「？」

上条が間の抜けた表情を露にする。そして、水が火に当てられて沸騰していくように、意味が分かってきた上条が、大きく叫んだ。

「はめやがったな!？」

それに、零次は足を止める。

今では何となく、垣根が策士と呼んだ訳が、分かるような気がしていた。自覚というよりも、手に取るように読めてしまう。

表情、息遣い、瞳、言動。それらをじっくりと見据えれば、人間の考えている事なんて、予測が付くのが当たり前だろう。

全知全能の神であるならいざ知らず、人に心理を隠し通す力はない。「そりゃあ、僕は医者じゃないからね。記憶がなくなってもさすがは上条君。つまらない罠に引っ掛かるのはお手のものなんじゃないかねえ?」

「……はあ、不幸だ」

ぼそりと申した上条の言葉をすりと抜け、零次は病室から出た。そうしてまた反転し、ドアを閉めようと手を伸ばす。

「じゃあ、お前は誰なんだよ?」

何気なく言っただろう上条の声にどくんと、零次は脈が速くなつた気がした。

自分が、誰なのか。

人名など、この世界で生きるための、ただの呼び名でしかない。名前は、存在を一個人として表すものなどとは決して違う。

橙色の瞳を一瞬もぐらつかせずに思考を働かせ、零次は言った。

「……次、会ったらちゃんと考えておくから。それまでは……ソウエルで覚えておいてくださいな」

言つて、ドアを素早く閉めた。

まっさらな少年には、何もかも悟られてしまいそうだ。動揺など微塵も見せてはいないのに、透き通った眼差しが、こちらを射抜くように視線が流れる。

……彼はまた、関わってしまったのだろうか？

一抹の不安だけが、零次の頭を掠めていく。一般人である上条当麻と言つても、禁書目録とともに行動していれば、嫌でも魔術師に出くわす可能性が出てくるだろう。

(……いいや、今は考えない)

軽い否定をしつつ、考えを変えた。

それよりも、自分には使命がある。イギリスからの潜入など、土御門にやらせておけば、あとは勝手に行うだろう。

「さあ、シナリオ通りに事を運ばせてもらうからね？」

誰に向けたのでもない声音が、静かな病院を駆ける。どうしようもない沈黙だけが、その場へと残った。

零次が去り、その奥。

黒っぽい瞳を鋭くして、少女は廊下に佇んでいた。

真夏の暑さもいざ知らず、少年の去り際を見届けても、苛立ち

覚めない。

「ソウエル……太陽か。どこまでも傲慢だな。まるで自分を神だとも言いたげな……よくも謙虚な振りしてられる」

ぎらりと、少女は視線を促した。

「反吐が出るな」

「そうかい？」

独り言に、冥土返しが答えたのだ。

どこかのストラップで見かけたようなカエル顔を、ゆったりと傾ける。

「……貴様には直接関係ないだろう？」

冷たく、少女は突き放した。そして、歩を進める。三鏡零次が去った方向を考えれば、恐らくは学生寮。

先の質問へああ、と冥土返しがうなづく。

「でもね、医者つてのは患者に平等でなくちゃいけない。あの子にも……もちろん、君にも」

「知らないな。私にとってお前に治療された過去など、何の意味も持たない」

冥土返しの言葉すら虚空を切らせた。

細めた視線で、窓の外の三鏡零次を見据えた。

どこか機嫌が良さそうに時折ステップを踏む所を見ると、余計に腹が立つ。

「偽善が……化けの皮を剥いでやる」

14話 書きと綻び（後書き）

ふう……何とか完成です。

やはりストーリーを作るのは難しいですね。一度使った言葉なども、数話前とかさかのぼらないので、めちゃくちゃになってないか心配です。

最近、何だか二次創作は大変だなあ、と思っていたのですが、その理由が分かりました。

ずばり、自分の考えたキャラクターでないのですよ。

とある魔術の禁書目録を書いたのは鎌池さんで、多分登場人物を考えたのも鎌池さんな訳ですから、どつりでキャラの視点になりにくいなあ、と（笑）

自身の作ったものなら、考え出した本人が一番分かっている事ですもんね。だから、次話からの創作は何だか楽です（爆）

15話 真相へと辿り着く者

「ひっ。み、見逃してくれ！」
脅え声。

不恰好に壁を背にし、身を竦ませている男がそう発した。

ほんのりと日差しが差し込むが、学園都市の路地裏は、まるで夜のよう暗い。

「見逃す？ テメエをか？」

冷たく言った少年は、真っ赤なスーツを着込み、へなへたと座り込んだ男へと歩み寄った。

「そんな命乞いするくらいなら、最初から俺を相手にしようなんて考えんじゃねえよ。……どこの誰に雇われたかなんて知らねえが、レベル4の発火能力者で俺を殺れると思ってるのか？」

金の入り混じった茶色い前髪を触りながら、『未元物質』垣根帝督は真っ黒な瞳を男に向ける。

細い通路であり、逃げ場はない。あるとすれば、今自分が来た道だけ。それをちらりと確認しながら、男が震えている。

正直、無理もない。

一本道、その奥へと進むには、垣根を突破するほかにないのだ。大能力者と超能力者の開きを知っているものなら、ごく普通の反応だろう。

(……期待外れか)

少しだけ、そんな思いも頭を掠める。

垣根帝督は、未元物質に満足してはいなかったが、同時に慢心もしていた。

学園都市の第二位。

その肩書きだけで、大多数の人間が慄く代物だ。能力という異質を開発している学園都市で、頂点に立つ才能のある証拠。

だからこそ存在する、慢心。

第三位から下では相手にならない。

第一位とも優劣の域まで持ち込める。

それらを総合して見れば、垣根が他よりも勝っているのは明らかであり、学園都市という枠組みに縛られずとも、一国とだってまともにも争えるだろう。

本心では、一方通行に対しても、垣根は見下しの笑みを浮かべていた。玉座に座っていても、所詮は単なる反射能力、それ以上でも以下でもない……。

甘かった。

一方通行のそれは、想像など馬鹿らしくなるほど遥かに超越する万能な反射と、追いつけない演算速度だった。人知の及ぶ所ではない、もっと別の次元。

ぎりり、と垣根は奥歯を噛み締める。

「わ、分かった。も、もうお前の暗殺をやめるように告げる。だから見逃してくれ！俺もあいつらが怖かったんだ」

両手を振って、男が弁解する。

必死な様子から、脅えているのが嘘でない事は火を見るより明らかであった。だが、被害を被ったこちらも、この男を殺す権利が発生する。

(知れた事だろ……)

自答し、ゆっくりと右足を上げる。

ごっつ、と轟音が路地裏に響き、骨まで砕きかねない急速で、垣根は踵を振り落とした。

「な、何を……」

踵がこめかみのやや右を掠めた男が、不安に押し潰されそうな声を上げた。

そんな男の胸倉を、垣根はぐつと引き上げる。

「消える」

耳元で残酷に囁くと、男がさらに青ざめる。垣根が掴んでいた手を離し、安定しない足取りで、男が後方へと過ぎ去っていく。

これで、良かったのだろうか？

見逃した所で、彼がどこかの組織に事実を話そうが話すまいが、確実に殺されるだろう。もしかすると自分よりも惨い殺され方をするののか。

垣根の頭を一瞬巡った思考は、すぐさま意味を成さないものとした。

「優しいのね？」

ぱんつ、と乾いた銃声が鳴る。

薄っすらと目を見開いて、垣根は振り返った。

メジャーハート
「心理定規か」

「あら。相変わらず他人行儀ね。……それより、今までは仕事に支障を出さなかったあなたとしては、考えられない行為じゃないかしら？」

派手なドレスを着た少女だ。鮮やかに夜光に塗れた光が、金髪を映し出す。

少女　心理定規の足元。

先程自分が見逃したはずの男が、鮮血を流し、倒れていた。呻き声も上げない所を見ると、脳へと打ち込んだのだろう。こんな事、垣根にとっては日常茶飯事であった。

「これ、どうやら『アイテム』が送り込んだ、使い捨ての駒みたいね。それでもレベル4を用意して来たのだから、あなたを相当危険しているという事よ？」

話しながら、心理定規が拳銃をしまう。『これ』と示した男へと目をやった後、こちらに視線を向ける。

「……人が変わったよう、と言えいいのかしら？」

「変わらねえよ。俺は前から、大抵殺さねえように生きてきたはずだぜ？」

「そうね。でも、以前のあなたなら一般人は殺さなくても、自身に危害を加えようとする人に、そこまで甘かった？ ちょうど、その傷を負ってからね……」

心理定規の言葉に、垣根は腹部へと右手を寄せる。

冥土返しの治療を受けたと言っても、まだ、動けば微量に痛みを感じた。表情を変えずに、垣根は訊く。

「……お前、超能力以外の力を、信じるか？」

心を計る心理定規が、すぐに返さず言い渋った。

ある意味、少女にとっては、先のレベル4を殺す事よりも難しい事だったのかも知れない。

「……ある、と断言するのは辛いけれど、存在するとは思っわ。元々超能力だって、学園都市が作られなければ、発見される事すらなかった力な訳だし」

口元に指を当てて、心理定規が答えた。

結局、真相は分からないという結論なのだろう。

ある少年と、垣根は出会った。

自分と一方通行の戦いの最中に、逃げ出すような少年。

それでも、自分が惨敗する寸前に、よもや許可など関係なしに助けようとする。

白とも、黒とも思える少年であった。自分で強能力者と公言しておきながら、気絶しかけた垣根でも観測できたのは、一時期でも一方通行の演算を上回った、その少年の姿。

「何か面白い事でもあったの？」

唐突に、心理定規がそう言い出したのだ。

「あ？」

「笑っているわよ？」

心理定規の声に、垣根は緩んだ頬をさらに緩ませる。

「くくくっ」

「ご機嫌ね」

「ああ、機嫌は最高に良い………そいつ、処理しとけよ？」

言って垣根は、路地を出て街中の光を浴びた。

天空から降り注ぐ日光に手を伸ばし、掌を閉じる。

夏休みの期間で騒々しい場で、垣根は決意表明のように、口を動かした。

「テメエに文句を言うのは、もう少し後になりそうだ」

15話 真相へと辿り着く者（後書き）

だいぶ遅れましたね。

今回は、一応冷蔵……ていとくんにスポットライトを当てました。吸血殺し編をスルーして（笑）オリジナル展開に入ります。

……くだらない話ですけど、禁書はキャラが多いですね。死ぬキャラも多いですが、さすがに全員を登場させるのは何とも厳しいものがあります。

それと個人的な見解ですが、ていとくんの出番が十五巻でぱったりっていうのも何だか勿体無いような気がしていて、今作では準レギュラー的な扱いで行こうと思っっています（まあ、さすがに放置しっぱなしはありえないでしょうが……）

16話 ささやかな日常

「ありがとうございますあ」

明るい声で、洋服店の女性が決まり文句を告げた。

礼の角度も三十度前後のちょうどいいものとなっており、ただのアルバイトではないと思わせるには十分過ぎる。

学生が八割を占める学園都市で、珍しい普通の従業員であった。

「……あの、ではこちらはどうしましょう？」

「へ？」

女性の問いへと、少年は抜けた声で応対する。

その女性が満点の笑みから怪訝な表情を映し出した。両腕に掛けるようにして薄緑色の病衣を持っている。

「あ……できれば処分お願いします」

いつもと同じ学生服を着て、少年 零次は丁寧にお辞儀をしたのだ。

思えば、馬鹿だった。

病院を出た後も病衣のままふらつき、学生服がない事に気がついたと思ったら、点滴にて栄養を補給していただけの体は、真っ先に悲鳴を上げた。

それだけでも大変であったのに、空腹感に襲われ、銀行へと向かって残金を確認するとんでもない額になっていたり、超能力者の待遇に思わず尻餅を付きそうになった。

そして、衣服の購入。

常盤台中学のような有名お嬢様学校の制服は一般人が購入する事はできないが、上条の学校の制服など、そこら辺の洋服店にいくらでも予備がある。

(……戻るのが面倒だったただけだ)

あはは、と苦笑いを重ね、零次は洋服店を出て、向かいのファミレスへと駆け込んだ。人が見れば突風が過ぎ去ったかのような速度で自動ドアの前で止まる。淡々しい水色の髪のはためきが、一瞬で動きを停止した。

「いらつしゃいませー」

洋服店の女性と同様に、こちらの定員の女性もきちんとした礼をこなす。

慣れた手付きで、『こちらへどうぞ』とふんわりとした右腕が伸びる席に、零次は座った。

四人用のテーブルに、かたん、とメニューが置かれた。

「ご注文、お決まりになられましたらお呼びください」

「あ、ちよつと待った」

定員へと開いた右手を向け、静止を掛ける。

零次は素早く置かれたメニューを開き、料理名がずらりと並んだページを見て、声をひそめる事なく高らかに宣言した。

「ここからここまで、全部くださいな」

メニューを指でなぞり、零次は目を輝かせた。

もはや、人類の夢である大人買い。その大人買いでも、物品……つまり本やゲームなどでなく、即座に胃袋へと消えていく食べ物で実行するなど、本物のお金持ちにしかできない芸当だろう。

定員の女性も、さすがに二の句が継げなそうに口を開けたが、やんわりと微笑んで、

「かしこまりました！」

と、爽やかに会話を終え、女性がメニューを持って厨房へと消えていった。

「最近、妙に引つたくりが多いですねー。それも武装集団スキルアウトが能力者を狙ったものばかり……」

不安が混じっているのか、携帯電話の向こうから聞こえた少女の語調は、最後にはやけに小さくなった。

相手は、初春飾利。

年中頭に花を象った髪飾りを大量に付けているためか、黒髪ごと花瓶のように見えなくもない。

主に無能力者と能力者の単純な違いは、大量の機器を使わなければスプーンすら曲げられない者と、力を加えずに「えいつ」と念じるだけでスプーンを曲げられる者、そんな程度の違いである。

事実、レベル0とレベル1との垣根なんて、上位の強度レベルから見ればどんぐりの背比べもいいところで、スプーンをいくら曲げられようと、コインを音速の三倍で飛ばすような人間には、とても太刀打ちできやしない。

……だが、それも無能力者からしてみれば、絶大な差に感じられるのだろう。

「まあ、引ったくりで済んでいるだけ可愛げがありますわね」

極薄の携帯電話を耳に当てながら、白井黒子は周囲を確認した。

夏休み気分でも浮かれています。学生が大半を占めているからか、風紀委員の活動にも拍車がかかっている。現に白井のような大能力者までもが駆り出され、第七学区周辺の見回りを任されているのだ。

『それより白井さん。例の人見つかりました？』

初春の颯爽とした話題変換に内心驚きつつも、白井はため息混じりに言葉を返す。

「いえ、影も形もございませんの。まったく、前回は何もせずとも網に掛かりましたのですに……」

『ははっ、しょうがないですよ……。でも不思議ですよね。ちょっと前に始めて書庫バンクに記載されて、今になって超能力者の認定が下りるなんて……。そこまでして探さなきゃいけないんですか？』

ええ、と頷いてポケットから物を取り出す。

（まさかあの殿方がお姉様と同格とは……。点さすかの黒子でも思いも寄りませんでしたの）

心中で吐露し、数歩前へと歩く。

何も白井は学園都市での初犯が食い逃げという、前代未聞の超能力者を捜索していた。異例過ぎた昇格や食い逃げなどの理由で探している訳ではない。

奇妙な贈り物。

読めない記号を用いた数式が中心に書かれた、円形の厚紙だった。淵を墨でなぞったような黒い跡があり、真ん中より右に逸れた位置には少年の名が記されている。

「……嫌な予感がしますの」

そっと、白井はそれを見つめた。

科学の街、学園都市では見慣れない風貌ながら、白い厚紙からは

どうにも悪寒が感じられる。

『風紀委員の事務所前に置いていくなんて、凝った悪戯ですね』

そう、意図的か否か、呪いが籠っていそうなそれは事務所の目の前に落ちていた。既に残された指紋と学園都市の総人口で認証をしたが、一致した者はいなかった。

いわく、外部からの物品。

「悪戯程度で済むのが、ちょうどいいかも知れま……」

言い掛けて、白井は言葉を留めた。

第七学区は、他の学区に比べて学生への販売店などが目立つ。そのためか、お金を引き出す銀行も多く、最も強盗などに狙われやすい学区と言っても過言ではない。

『白井さん？　どうかしたんですか!?!』

声を荒げて、能天気な少女がいつになく叫んだ。

数年一緒にやってきた相棒パートナーであるためか、こちらが黙った瞬間に何かを感じ取ったのだろう。

少女を安心させるため、聞こえるように白井は大きくため息を吐いた。

「何でもありませんの。初春、それより」

がちや、と白井は手錠を取り出す。従来の鉄鑄とは違い、事務所倉庫に眠っているIDを入力しなければ、例えどんな能力者でも逃げ出せない、屈強な手錠であった。

「食い逃げ犯を一人、捕らえなければならぬようですわ」

心底面倒そうに、白井黒子は電話の主へと呟き、携帯をポケットに戻す。

まだ、現状は未遂である。

前科はあるが、必ず行うとは限らない。だが、数日前には数個のハンバーガー代すら払えたかった人間が、どうして高級料理店のフルコースをも上回ったと思える料金を支払えるだろうか。

もう一度手錠を翳して、白井は料理を頼張っている学園都市第四位、三鏡零次の捕獲を模索し始めた。

16話 ささやかな日常（後書き）

ふう……足が痛いです。

実はうちの学校では34キロほど歩くのが伝統らしく、先週行った行事であるのにまだ疲れが取れていません（自分は走ったのですがね）

そんな事より、一応新章突入です！

いやあ、また何話掛かるのか想像もできませんね（笑）

一応電撃文庫応募用に知識蓄え中で本を読み漁っているので、北欧やギリシアの神話と世界的な魔術についてほどほどに詳しくなりました。それにしても、やはり被せてはいけなそうと思ひ、応募用に使わなそうな知識を振り撒いていきます。本がパチモンでない限り、まあまあ専門的な事ではないかなーと思います。

それでも、まだ十冊程度呼んでいない本が残っているのですが……。

17話 胎動のきっかけ

絶望。

きつとそれは、神が人間に与えたもつとも忌み嫌われているものだろう。

例えば古代ギリシア、神々はパンドラという少女を創り出した。理由は単純、最高神ゼウスに幾度となく悪巧みを仕掛けたプロメテウスの弟、エピメテウスへと嫁がせるためである。パンドラの名の意味は、パンは『すべて』、ドラは『贈り物』という意であった。これは、ゼウスが行った報復のようなものだ。

ある時、エピメテウスの留守中に、夫が一つの甕を大事そうにしまっているのを、パンドラは見つけてしまった。

『あの中に、一体何を大事そうにしまっているのかしら』、と好奇心旺盛なパンドラは、気になって仕方がなくなってしまい、ついにその甕の蓋を取り除いてしまう。

開けた直後に噴き出したのは、人間たちの『苦しみ』だった。病気や、たくさんの災いを止めるためにパンドラが即座に蓋を閉めたが、ただ一つ残ってしまったものがある。

希望。

だから人間は、どれだけ災いに苦しめられても、心の内には希望を持って生活する事ができるのだ。が、それは逆に希望が辺りを漂ってはいない事を意味している。

結局、すべては最高神の掌であったという、絶対に届かない人間と神の差を描いた物語。決して領域を侵せず、どんな手段を使っても普通の人間では歩めない境地だ。

人と神。

計り知れない境界線を飛び越える者がいたならば、人々は新たにそれを神と崇めるだろう。

それに、ある意味絶望を味わっている少年は、有り余った料理を目の前に頂垂れていた。

「んー、今日のシャケ弁は先々週のと違うような……」

「結局さ、今は桃がキてる訳よ。苺シロップね、苺シロップが最高」

ざわつく客もいる中、三鏡零次は沈黙していた。まるで自分が存在している場だけ別世界のように、物音がない。水を打ったみたいな浸透していく空間で、零次は視線を泳がせた。

おおよそ、十皿は平らげただろう皿が、隅っこで縦に積まれている。あくまでここはファミレスであり、形の違う皿は適当にばら撒いていたが、それを含めれば二十皿は軽く超えていた。

だが目の前に広がるのは、積み重ねた皿すら凌駕する料理の山であった。ラーメンやカレーといったメジャーな食べ物から、少しイタリアンなパスタまで選り取り見取りである。

いいや、結果少年を苦しめているのは、その膨大な量だっただろうか。

「……………こんなに食えるか」

半ば自棄になり、零次は背もたれに寄り掛かった。首をぐらりと後方に傾け、真っ白な天井を見上げる。

もし、仮にこれ全てを放置して帰った場合、店員にどんな顔をされるか。もっと突き詰めるなら、営業妨害で二度と入店させてもらえなくなってしまうかも知れない。

あー、と唸りながら、零次は頭を掻いた。

(インデックスでもいればなあ……………)

と、虚ろな眼差しで天を仰ぐ。

インデックス、あの少女の胃袋ならば、この程度余裕で制覇して次の店へと向かっていってしまうだろう。

イギリス清教は食費とかどうしてたんだろ？ などと頭を過ぎら

せながら、ちょうど後ろが見えるくらいに首を曲げる。

「はえ？」

何とも締まらない声で、零次は言葉を漏らした。

年は、同じくらいだろうか。肩まで伸びた亜麻色の髪は、白い半袖の制服に溶けてしまいそうだった。短めの青いスカートから出た膝で椅子に乗り、食い殺すような目付きでこちらを凝視していたのだ。

「む？ 何だ？」

見ていた事に気がついたのか、微妙に少女の瞳がこちらを向いた。それまではやや遠くを見つめていたような気がする。場所に、料理どっさりのテーブルの上か……。

(……まさかね)

一度前を向いて、思考が辿り着いた結果に零次は首を横に振った。昼時、しかも女子高生がファミレスに足を踏み入れているのだから、食事以外に用途はないだろう。

再び、少女の側を向く。

次は表情や髪色などといったものでなく、少女の座っている椅子のテーブルを目視した。テーブルには飲み干して氷だけが残っているグラスと、手付かずのメニューが無造作に放置されていたのだ。

「……あのさ」

覚悟を決め、零次は少女へと話し掛けた。今度は売られていく子牛を見送るような哀れんだ様子でこちらのテーブルを見据えていたが、呼び掛けで視線を合わせた。

「む？」

「お腹……減ってたりとか」

無気力に椅子へとしがみ付いていた少女が、勢い良く椅子の上に立ち上がった。

こちらを見下ろす形となり、腕を組んで大きくその少女が叫んだ。「何を馬鹿な！ 人は水さえあれば一週間は容易く生きられるのだぞ！ つまり、私が空腹感を感じているかと言えば」

刹那。

ぎゅるるる、と少女付近からけたたましく鳴り響く。

どこからともなく聞こえた不可解な音は、少女の言葉を否定するのに十分過ぎた。椅子を降りて頬を赤らめた少女が、詰まらせながら言葉を紡ぐ。

「……あ、あれだ。これは一身上の都合により放出しなければならぬ理由があつてだな」

「うんうん、言いたい事は大体分かったから」

「貴様っ！ その顔は分かかっていない奴の顔ではないか！ この私を辱めた罪は山よりも高い事を肝に銘じてろ！」

指先をびしつと伸ばして、少女が声を張った。

長く言葉を続けて少々噎せながらも、どうにか会話を終えたようである。

はいはい、と零次は適当に流し、立ち上がって向かいの一席をゆつくりと引いた。

「とりあえず、座りますか？」

さつと、右手を広げる。

微笑を噛み締めて、席に腕を流したのだ。単なる似せただけの英国紳士の真似事だったが、意気消沈したその少女は渋々と従い、椅子に腰を掛けた。

17話 胎動のきっかけ（後書き）

いきなりですが、才悩人応援歌、いい曲ですよ。

個人的に、弱い主人公って好きです。書きやすいついていうのもありますが、やっぱり成長していく過程を想像できますからね。伸び代があつた方が敵の強さも調節しやすいし、何より主人公が強すぎると最終的に凄いインフレになっちゃいますから（笑）
でも、苦手ってだけで強い主人公も好きですけどね。

それより今回も短いですね……。wordで書いてから載せているのですが、ほとんどの話は二枚と三枚目に突入して半分程度の分量です。それ以上は時間足らずで……。

アイテムがほんの少しだけ、しかも二人だけ登場です。次回から垣間見せているだけで色々とストーリー構成ができそうなので、書いている側としても楽しみになってきました。

追申、ほんの少しの間旅行に行く事になったので、一日ほど更新できなさそうです。それと自分が気に入らないので一方通行との戦闘描写を後に修正したいと思います。

18話 交わらない二つ（前書き）

あれ、フレンドって麦野の事呼び捨てでしたっけ？

というか、フレンドって麦野の名前呼んだ事ありましたっけ？

何だか不安でいっぱいですが、絹旗視点で始まります。

18話 交わらない二つ

どこからか、少女の怒鳴り声がファミレス内に響き渡った、数秒後。

やわらかそうなニットのワンピースを着た絹旗最愛は、両手にドリンクバーで注いだグラスを二つ持っていた。

「……………？ いつも喧しいですけど、今日はなんだか感じが違いますね。え、と……………滝壺さんはどう思いますか」

と、少女は背後で同じようにグラスを二つ所持した滝壺理后へと、絹旗は心配そうに目を向ける。脱力し切った少女の瞳は妙にうるついていて、歩き方など危なっかしくて振り返らずにはいられない。

「……………南南西から信号がきてる……………」

そうですか、と相槌を打って絹旗は再び歩き出す。

元々、向こうに座っている『アイテム』のメンバー二人が手伝えれば、それで事が済むはずであった。そのはずだったが、窓際にどっしり席を構えた半袖コートの女 麦野沈利と、隣で桃の缶詰に苺シロップを加えるという暴拳以外の何物でもない行為を行っているフレンドという少女、その二人はまったく言っていないほど動こうとしなかった。

(はあ……………仕事的时候は超俊敏なんですけどね)

思いを馳せながら、絹旗は前を向いた。

やはり、席を見据ええると、金髪に碧眼を煌かせてフレンドが缶を弄くり回している。その隣でシャケ弁に数回手を付け、あとは携帯をうつとりと眺めた麦野の姿があった。何か思い詰めているようで、若干頬が赤い。

「はい、持ってきましたよ」

滝壺を奥に座らせて、グラスを置きながら絹旗も席に着いた。

ことん、と二人の前にそれを置いたが、即座に反応したのはフレ

ンダだけだった。

学園都市現在第五位、麦野沈利の目は携帯の画面に向きっぱなしである。

「あの、超大丈夫なんですか？」

こちらが見えているのか分からないが、放心状態の麦野に、絹旗は話し掛けた。当然のごとく言葉は麦野の耳をすり抜けるが、代わりにグラスを一気に飲み干したフレンドが答える。

「良くわかんないおばさんから送られてきたデータをしきりに見ているけど？ 結局、麦野も人の子だったって訳だわね」

ふふつとフレンドが小馬鹿にしたように口に手を当てて笑みを噛み殺していた。

良くわかんないおばさん、とはおそらく指令者の事だろう。『こいつときたらーっ！』と非常にうるさいのが特徴の、フレンドいわくおばさんである。

「データ？ 今時期に新しい情報っていうと超能力者みかがみれいじの情報しかないですかね。序列が下がるきっかけの人物ですし、気にするのも仕方なくありませんか？」

「ぶつ……まあ、普通はね。憎さ余って愛しさ百倍って奴よ」
殺しきれなかった笑いが、フレンドの口元から漏れる。どうにも意味も言葉も違うことわざだったが。

先程までなら簡単に無視していた。だが機械のように頑として動かなかつた麦野がぱたんと携帯を閉じ、両手を伸ばした。

ふわふわと揺れながら関節を伸ばしていく麦野の掌は、白い肌の上で動きを止めたのだ。

つまり、フレンドの顔。

え？ と疑問符を浮かべた碧眼の少女を、子猫を撫でるように麦野の手が頬へと滑っていく。

未だに困惑している少女へと、滝壺が哀れんだ視線を送る。それにつられるようにして絹旗は苦笑いを浮かべ続けた。

すぐさま、ぎゃーと可愛らしい絶叫。

ぐっと頬つぺたが干切れるくらいに握られているフレンドにとっては、叫びが幼稚だとか考える余裕すらないらしい。

睨み付けるでもなく、震えた瞳を翳した麦野が狂ったような声を搾り出した。

「ふーれーんーだあ？ 何を言ってるのかなー？」

当の麦野の顔は、苛立ちを隠さずに頬を引きつらせていた。その恐ろしげな声はゆっくりと、そして用件だけを伝えている。

すなわち、黙れ、と。

「結局！ 私の推測は当たってたって訳ねーっ！！」

悲鳴に挟んでフレンドが行ったのは、勝利宣言にも思えた。だがそのせいで麦野の逆鱗に触れるだけに飽き足らず、それを思い切り引っ叩いてしまったのだろう。

「超地獄ですね」

一層強まった麦野と、やっと謝る気になったのかソファの上をばんばんと叩き続ける少女の姿を、両者ともに絹旗は見据えた。

ファミレスの店員など、注意にくる事さえ適わない。麦野の見た目は単なる女子高生だが、何か恐怖のようなものを感じるのだろうか。

「……大丈夫」

生気の宿らない目の滝壺が小さく呟いた。多分、向こうの二人がうるさ過ぎて自分以外は聞こえていない。

「何がですか？」

と、絹旗はだらん、と顔を横にしている滝壺に訊いた。

無気力な少女がこちらを向く。

「私は、そんな麦野を応援してるから」

また自分だけに聞こえる声で、何らかの意思表示のように答えた

のだ。

「むむ？ 騒がしいな」

悲鳴を聞き取った少女が、一度スプーンを置いた。

とんでもなく、少女の食事速度は速い。

既に最後の一皿に入ってしまったし、何だか追加注文までしそうな勢いである。そんな事を危惧しながらも、零次は先の少女の言葉へと続けた。

「君も人の事言えないんじゃないかな？」

む、と一瞬不機嫌そうに口をへの字に曲げる。

どう見ても、日本人には見えなかった。自分の髪は天然で水色という異種ではあったが、国籍も存在するのだから日本人なのだろう。正確には不明だ。

だが、イギリスにも国籍はあっただろうし、もしかしたらハーフなのかも知れない。

「ふふん。我が美声が聞けるのだから、それで満足だろう？」

と、真面目なのかはぐらかせているのか、よく分からない発言を

少女がした。置いたスプーンを掴んでそそくさと平らげ、がしゃんと白い皿を積み上げる。

「ふむ、中々味を追求した店ではあるな。見た目に拘らずに濃いめ薄めと二転三転する味付け……やはり料理とはこうでなければ」

「そう？ 満足してくれたならそれでいいんだけど……」

財布を取り出して、零次は会計の準備を始める。

きらりと、昼時の太陽の光をそれが浴びて、光が零次の瞳へと舞い込んだ。

銀で回りを覆った、ネックレス程度に扱チエーンう小さな鎖である。視線に気付いたらしく、少女がそれを引っ張り上げた。

「何だ？ これが気になったのか？」

言って、自慢げにそれをこちらに見せびらかしたのだ。

「一応ね。それって何かの宝石？」

それは、銀色に光り輝いた、それでも銀とはどこか違った雰囲気の金属。

だが、見覚えはある。

ヘキサグラム
芒星六角形を象ったソロモンの六芒星。

ソロモン七十二柱を封じたソロモン王の遺品である。

一位から七十二位には上下関係が存在し、一桁の魔王たちは皆、数十の軍団を支配すると言われている。それらの召喚に必要な、一種の呪物。

恐らく、本物だろう。

中心点の重心も、六つに広がった鋭利な部位も、どちらにも一片の狂いすら感じなかった。

魔術結社との売買に扱ったとしたら、時価数億は下らない。

「お守りだ。きっと私はこれを死んでも手放さないぞ？」

景気良く笑みを寄せて、再び右ポケットに少女がそれをしまった。

「それに一宿一飯の恩義……まあ一宿はしていないが、貴様の未来

でも見定めてやるっ」

「いや、いきなりそんな事言われても」

「気にする事はない。私は大アルカナの法しか知らん。だが外した事はないからな」

今度は左のポケットから、少女が青いトランプのようなものを取り出した。

タロー。

タロットという表記が日本に存在しているらしいが、逝かれた宗教団体に堂々と発言して殺された事例もあるため、名称などは徹底的に教え込まれたのだ。

大アルカナの法とは、カバラ魔術の生命の樹に順じてカードを置いていく事である。その先には専門家にしか分からないが、どうして知っているのだろう。

「よし、開くぞ」

十枚を上下の三角に分け、左右にも三角形と重なったのが三枚、柱のようにカードを並べた。そして最後の一枚を真下に置き、少女が左辺の柱からカードを開く。

と、同時にすべてを回収してしまった。

「何？」

慌しく青いカードを集めた少女に、零次は首を捻った。

「ああ、見てはいけないものを見てしまった気がしてな」

「は、え、何？ それだとなんだかもものすごく悪いみたいな言い草じゃ……」

「こくりと、少女が頷く。

「……どのくらい？」

「柱の部分、つまり試練や運命といった概念しか見てはいないが、迷う事なく最悪の分類に入るだろうな。理解ヒナに皇帝の逆位置、峻巖ゲブラーに吊るされた男の逆位置、栄光ホトに太陽の逆位置……」

「……？」

「掻い摘んで言うなら、貴様は何かに失敗し、自信を喪失して無駄

な犠牲を払うという意な訳だが……。どうかしたか？」

多少片付いたテーブルに、零次はがん、と顔を埋めた。

変な話であるが、零次は占いは信じていない。それでも目の前で予言されてしまうと、本当に当たっているのでは、と思える。

いわゆる、心理の読み取りにもっとも近いが。

「落ち込む事もないだろう？ ほかを確認してはいないから何とも言えんが、救いのないタローはないのだからな」

真剣みな顔を和らげ、立ち上がった少女が励ましの語を送ってきた。零次が顔を起こしたときには、ひらりと一枚のカードをテーブルに投擲していた。

「これはくれてやる。貴様に一番似合うのだろう？」

テーブルに置かれた青いカードを捲る。

太陽。

先に逆位置と少女が言っていたカードだった。なぜこれなのかを問おうにも、振り返ってみても少女の姿は見えない。

まるで自由に吹きさらした風に乗っていったような、颯爽として自然な去り方だ。

(……というか僕も帰るんだけど)

態々別々に出なくてもいいのに、と独り言をして、零次も席を立つ。

会計を済ませるために数歩前に歩くが、財布を置きっぱなしにしていた事に気がつき、振り返った。

が、テーブルには無残に重ねられた皿以外、何もなかったのだ。

ポケット内をもう一度調べるが、重量はなく、空っぽだった。

「ほれ」

声の方向には、自動ドアの前で少女が手を振っていた。その少女の手に握られているのは見覚えのある皮製の財布。

(あ、れー？ 僕の財布もあんなじゃなかったかな？)

しばしなくした財布の形状を連想し、そして少女の含み笑いを見

据えた。

占い料だ、と言い出しそうな表情であった。それから導き出される答えなど知れている。

そして、少女が自動ドアを潜った瞬間に、零次も床を蹴った。

「ちょ、ちよつと待って！」

客足が増え、前を歩いている人もいる中、零次はそれらを掻い潜る。

会計を待っていたのか、笑顔でレジの裏にいた店員の顔が垣間見えたが、無視して一旦外へと出た。

左右をキョロキョロと確認するが、にんまりと笑う少女の姿はどこにもない。

「……まあいいや」

と、零次はすぐに探すのを諦め、割り切ってしまった。実際口座から全額引き出した訳ではないし、引き出せば済む事である。

……引き返せる、と思っていたのが甘かったのかも知れない。

カチツ。

右手首に、冷たい感触が襲う。

どこからともなく現れた丸い器具が一つ、右手首にぶら下がっていた。重量に気付かないほどの早業か、それとも一瞬で現れたのか。

「さて。午後十二時半と言った所ですわね」

背後の言葉に聞き返す事なく、零次は冷や汗を垂らした。

手首に装着されたのは、学園都市産の手錠だろうか。本来鎖で繋がれるはずの部分まで接着させられ、がちゃがちゃと動かす事すらできなさそうである。

零次は、横目で後ろを確認した。

やはり、見えたのは常盤台中学の制服。茶色が混じった栗色に近い髪がツインテールとなって二つに分かれ、初夏の風で悠々と揺れている。

「無銭飲食の容疑で同行してもらいますが、よろしくて？」

聞こえたのは、悪魔の囁きだったのだろうか。

18話 交わらない二つ（後書き）

今回は少し量を増やせたと思います。

恐らく次回からは元の量に戻ると思いますが（笑）

ここからは完全にオリストですが、吸血殺しが終わるまで続くのだろうか？

一応上条が退院してから少したったあとですよ？ 今現在はまだ入院中な訳だから……。

とりあえず、前回までの適当な章分けはやめて、ちゃんとやってみました。科学サイド中心の話にしようと思っっていますが、一応魔術も絡ませるつもりです。というか、実際どうなるかはまだ未定で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7672v/>

とある魔術の全能氷域『オールレギオン』

2011年9月25日03時12分発行